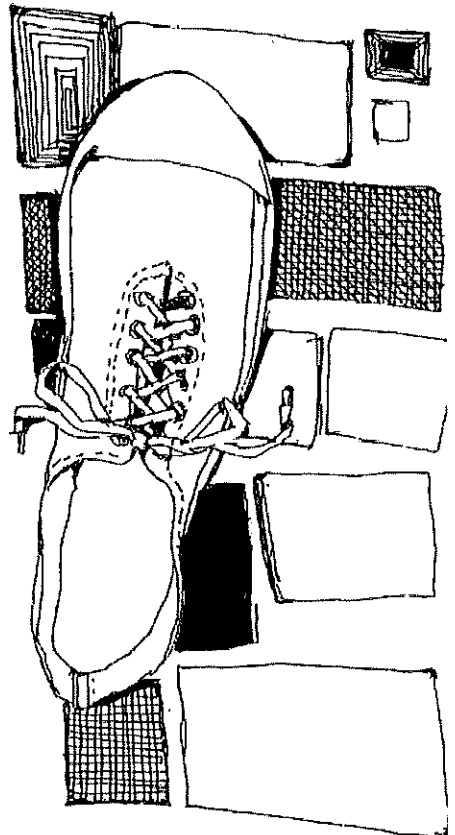
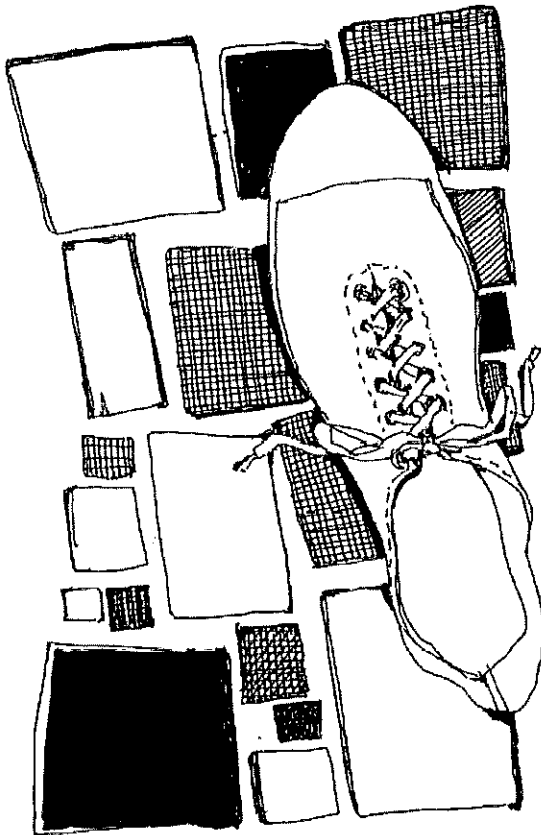
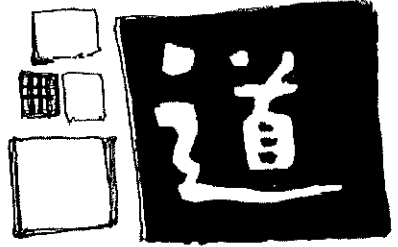
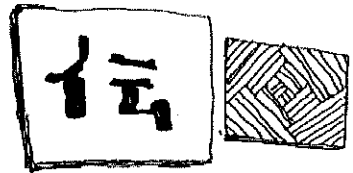
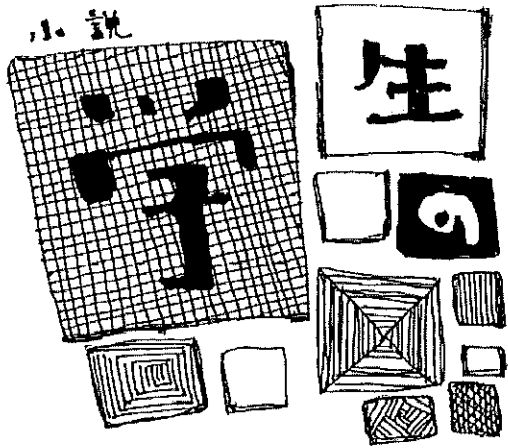


小説





小説
学生の伝道

浜田
進

昨夜の雨で桜がいっそう散った。木々の所々には新緑が芽生えている。それを見ながら相田愛作（あいさく）は考えていた。そこへ同じ学科の稲葉が通りかかった。

「おい、愛作。何してんだ？」

愛作はその声に気付かなかった。自分はこの学校でこれから四年間過ごすのか……。そう思うとため息が出た。

「おい、愛作。シカトすんなよ」

「あれ、稲葉じゃん。いたのか」

「今頃、気づいたのかあ？どうしたんだ」

稲葉は愛作と同じ国際文化学科の学生で高校の頃からの同級生だ。しかし、愛作は稲葉のことが嫌いだ。いつも人の噂話ばかりしては、陰口を言っているからだ。自分も同じように他の人の前で悪く言われているかと思うと嫌気がさした。

「愛作、お前知ってたか？美咲ちゃんが丁女大（キリスト教主義の女子大）にいったって」

「丁女大？N大じゃないのか？」

「俺もそうだと思ってたんだけどな。補欠入学だってよ」

愛作は高校生の頃、密かに思いを寄せていた美咲のことを思った。結局、自分の気持ち打ち明けることもなく卒業してしまった。しかし、N大に行ったのであれば、地元であるし、また会う機会もあるだろうと思っていた。しかし、東京に行ってしまったのではその期待は空しい。

稲葉は深いため息をついて言った。

「ああ、東京か。美咲ちゃんが東京の女になっちまうか。女子大ってさ、結構コンバとか多いらしいぞ。俺さ、

美咲ちゃんに告ったんだ」

「え？」

「でも、あっさり断られたよ。かわいい顔して言うことはきつかったよ」

「なんて言われたんだ？」

「そんなこと俺の口から言えるわけねーだろ」

稲葉は笑いながら言ったが、目は真剣だった。

「ごめん」

「お前さ、何かサークル入るのか？」

「まだ考え中だよ」

「俺さ、軽音楽部に入ろうと思ってんだけど、お前も一緒に入らないか？」

愛作はギターを弾ける。中学生の頃に教会のキャンプに参加して以来、ずっとギターは練習していた。日曜日はCSでギターの奉仕をしている。

「俺はいいや……」

愛作は乗り気ではなかった。稲葉と一緒に入りたくないと思った。それに軽音楽部の部室を見に行った時に、部室の前にはたむろしてタバコを吸っている光景がどうも好きになれなかった。それよりかは、フォークソング部の方が自分にはあっているように思えた。

「お前。今日はおかしいな。なんか元気がないし。まだ四月だっていうのに五月病かよ」

「そうかもな」

愛作はそう呟いた。そして桜の木々にまた目をやった。

サクラチル……か。愛作はN大の英米科を第一志望としていた。しかし結果は不合格。結局、第二希望のA大の国際文化学科に入学した。入学したものの、愛作は浪人すべきだったのではないかと悩んでいた。

愛作が家に帰ると手紙が届いていた。差出人は西原慰子（やすこ）という見知らぬ人からだった。手紙にはこう書いてあった。

突然のお手紙を失礼します。私はA大三年の西原慰子と申します。私は大学で聖書研究会というサークルの部長をしています。愛作君の教会の先生、そしてK G K（キリスト者学生会）の主事から愛作君の連絡先を伺いました。突然の手紙でびっくりですよね？どうぞお許しくださいね。

A大の聖書研究会のことを愛作君にご紹介したく筆を取りました。活動日は毎週木曜日の――
その後は聖書研究会、祈り会の活動日について丁寧な文字で紹介されていた。手紙の最後は次のように締めくくられていた。

神様から遣わされたA大で一緒に主の福音宣教のために労していきましょう。愛作君の参加をメンバー一同心からお待ちしています。

在 主

西原慰子

愛作はその丁寧な文字と文面から想像する西原慰子という人物に好感をもった。しかし、大学に入ってまでなぜこんな活動するのだろうかと思った。毎週日曜日の教会だけで十分だよ、そう思った。

履修登録が終わり、本格的に講義が始まった。一年生は一般教養と少しの専門科目の講義がある。高校の頃とは違って、大学の講義というものに愛作は戸惑いを感じていた。一度に二百人は入る大講義室で教授がマイクを片手に、黒板に読めない文字を書き殴っている。教授は学生たちが寝ていても、私語をしても注意せず、滔々と語っている。愛作はそのような講義をつまらないと感じていた。国際文化学科の専門科目もあまり興味を持つものではなかった。愛作は講義が終わるといつも、第一希望の大学に入っていたらもっと楽しく興味深く講義を聞いていただろうと思った。やはり浪人した方がよかったのかもしれない。自分はこのにいるべきではないのではないか。いっそのこと、学校を辞めたほうがいいんじゃないか。愛作の心の内はそのような思いでいっぱいだった。

2

五月の大型連休が明けた。入学当初は満席で座れなかった学食も人数が激減した。

「ゴールデンウィークが明けると、みんな学校に来なくなるんだってさ」
同じ学科の池田が昼食のラーメンをすすりながら言った。

「そういえば稲葉は今日来てないな」
「あいつもその部類さ」

池田は呆れたように言った。その言葉は明らかに稲葉を侮蔑していた。そして続けざまに言った。

「稲葉から今朝、メールがきたよ。『頼むから、出席名簿に俺の名前を書いておいてくれ』って」
「それでなんて返信したの?」

「OK。任せとけ』って送ったよ」

「へえ、それで池田は稲葉の代わりに出席名簿に名前書いてやったの?」
「書くわけねーじゃん」

池田は笑って言った。そして残りのラーメンをずずっとすった。

愛作は絶句した。いつも物静かな池田の本性を見たような気がした。

「このことは稲葉には内緒だぞ。正直者がバカを見るのはお前も嫌だろ」
「そうだな…」

愛作はそれ以上何も言えなかった。

池田と別れ学食を出ると数名の学生たちがチラシを配っていた。入学式の時次から次へとサークル勧誘のチラシをもらった。結局、それらはすべてゴミとなった。

入学式でもないのに珍しいな。愛作はそう思った。自分から進んでチラシをもらいに行くのはどうも気がひける。愛作はさりげなくチラシを配っている学生たちの前をゆっくり通り過ぎた。

「こんにちは。聖書研究会です。よろしくお願いします」

五月晴れの空にすつと響き渡る気持ちのよい声だった。愛作は胸元に差し出されたチラシを手を取った。
「あ、どうも…」

愛作は小さく会釈をして立ち去った。するとすぐに愛作の前方に猛スピードで走ってくる女子学生がいた。愛作

の方を見たその学生は誰かを発見しようだった。

「慰子お！探したよ。ゼミの発表準備しないと！今日は私たちの番だったのよ！」

「ええ！？来週じゃないの？」

「それが私もすっかり忘れてて、実は今日に変更になったのを慰子に伝えてなかったのよ！」

「ええ！そんなの？」

素っ頓狂なその声に周囲にいた学生たちが振り返った。愛作も振り返った。

ヤスコ……？聖書研究会…。

愛作の脳の中で何かが繋がった。

「あー！」

思わず声が出た。ひょっとして自分に手紙をくれたのはこの人ではないか。慌てふためく慰子ともう一人の学生は急いで走り去った。愛作はもらったチラシを見た。

「聖書研究会 活動日 木曜日五時」

活動場所 第一共通棟102号室」

活動日は今日だった。愛作の心に何か心地よいものが吹き抜けた。参加してみようかな……。そう思った。

四限のゼミ発表を終えた慰子はぐったりしていた。ゼミ発表の準備は三限を使ってベアの由香と必死にやった。教授からは厳しい指摘があったが、何とか乗りきった。

「無事に終わってよかったねえ」

「慰子、ほんとごめん。変更のことすっかり忘れてて。でも、三限がお互い空いててほんと助かったね」

「そうねえ。神様に感謝だわ」

「うん。今日ばかりは私も神に感謝するわ」

「ねえ。由香。今日の聖研も参加する？」

「うーん、そうねえ。さっきのゼミ発表でかなり消耗したけど、今日は神に助けられたし、行かないと罰があたるから行くよ」

「罰なんてあたらないよ」

慰子はくすつと笑った。二人は三年になってからゼミ発表の準備をする中で親しくなった。そして由香は先週から聖研に来るようになっていた。

聖研が始まった。参加者は慰子、由香、そして四年生の宮本隆、森田詩織の四人だった。

「由香ちゃん、よく来たね」

詩織が言った。

「今日は義理で来ました」

「先週もそんなこと言ってなかった？」

宮本が言った。

「先週は慰子への義理ですけど、今日は神への義理です」

「え？ どういうこと？」

「まあ、いろいろありまして……」

由香は楽しそうにそう言った。

そこへ愛作が入ってきた。

「こんにちは。ここ、聖書研究会ですか？」

「そうですよ。どうぞどうぞ。こちらへ」

慰子が言った。声が弾んでいた。

「お名前は？」

「相田愛作です」

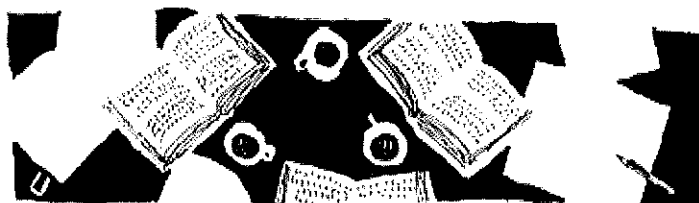
「おお！」

由香以外の三人が歓声をあげ、各々が言った。

「待ってましたよ！ 愛作君！」

「わあ、祈りがきかれたね」

「うん、こんなに早く祈りがきかれるなんて」



愛作は何が起こったのか理解できなかった。しかし、歓迎されていることはよく分かった。

3

初めて参加した聖研はなかなか楽しかった。愛作は日曜礼拝で牧師の説教を聞いたり、時々一人で聖書を読むことはあったが、ディスカッション形式で聖書をじっくり読むことは初めてだった。何度か読んだ箇所ではあったが、今まで自分が思っていたこととは違う考えを他の人から知ることができた。聖研後はみんなでお菓子を食べながら話しをした。

「愛作君が聖研に来てくれるのをみんなで祈ってたんだよ。特に宮本君が」

「そうそう。だってこの聖研には男は僕だけしかないからね。男のメンバーが与えられるようにずっと祈ってきたんだ」

宮本は照れくさそうに慰子に言った。

「わざわざお手紙ありがとうございます」

愛作は慰子に言った。

「ごめんね。突然の手紙でびっくりしたでしょ？」

慰子はそう言ったが嬉しそうだった。

「え、まあ。そういうえば、今日のお昼、チラシを受け取った時、何か大変なことがあったんですか？」

「お昼？」

「はい。ゼミ発表がどうのとか……」

「ああ！あれね。え？ひよっとしてあの時、愛作君いたの？」

「はい。チラシを受け取りました」

「え！そうだったの？」

「ねえねえ。愛作君ってどういう字書くの？珍しい名前だよね」

それまで黙っていた由香が急に愛作に尋ねた。

「珍しい名前だつてよく言われます。愛を作ると書いて愛作つて言うんです」

「ねえ、それつてもしかして旧約聖書のイサクからとつてる？」

詩織がひらめいたように言った。

「はい、そうなんです。イサクつていうのは英語でアイザック。父親がこだわつて愛作にしたんです」

「へえ、そうなんだあ」

慰子、詩織、宮本はすっかり感心してしまつた。しかし、由香は腑に落ちないようであつた。

「で、愛作君は何でクリスチャンなの？」

由香の語調は少し強かつた。

「何でつて……」

愛作は答えに困つた。

「まあ、親がクリスチャンで、自分も小さい頃から教会に行つていたんで……」

「じゃあ、親がクリスチャンじゃなかつたら、愛作君はクリスチャンじゃないわけ？もしも親がイスラム教徒だったら、愛作君はイスラム教徒なの？」

「由香、そんな風に言つたら愛作君がかわいそうだよ。ごめんね、愛作君。気を悪くしないでね」
愛作は動揺してゐた。そして何も返事ができなかった。由香は発奮して言つた。

「私は親の信じてる宗教なんて信じないわよ。それに親が自分の信じている宗教を子どもに強制するのもどうかと思つて」

「まあまあ、そんなに怒らないで」

慰子が優しくなだめた。愛作は黙つてゐた。

聖研後、愛作は宮本に誘われて一緒に食事をした。

「今日は僕がおごるから」

宮本は嬉しそうにそう言つた。

食事をしながらも宮本は終始、嬉しそうに愛作に話しかけた。

「僕はね、今四年なんだけど、去年からずっと男のメンバーが聖研に与えられるように祈ってたんだ。僕が三年の頃は四年に男が二人いたんだ。でも下級生には男がいなかったから、先輩が卒業したら男が一人になると思ってた。ずっと祈ってたんだ」

宮本は愛作が聖研に来てくれたことを心から喜んでいた。そして、来週からもぜひ参加して欲しいと言った。

「ところで、愛作はKGGKって知ってる？」

「愛作」と呼ばれたことが愛作は嬉しかった。

「けーじーけー？何ですかそれ？」

「キリスト者学生会っていう団体で、学内伝道することをクリスチャン同士で励まし合ってるんだ。このA大以外にもこの東海地区には多くの学校で聖書研究会のグループがあって、それぞれの学校の活動のために祈り合ってるんだ。KGGKの祈禱会は毎週月曜日に鶴舞駅の側でしてるんだ」

「へえ、そうなんですか」

「愛作も一緒にKGGKの祈禱会に行ってみない？」

「考えておきます…」

「ところでさ、さっきの由香ちゃんのこと、どう思った？」

「どうって？」

「なんでクリスチャンかって聞かれたことだよ」

「ああ、あのことですか。正直、答えに困りました。今までそんなこと考えたこともなかったのよ」

「そうだよな。クリスチャンホームだといっ信じたとか、よく分からないっていうからな」

「宮本さんはクリスチャンホームじゃないんですか？」

「ああ、僕は大学に入ってからクリスチャンになったんだ。僕の親も妹もクリスチャンじゃないよ」

「そうなんですか」

愛作は宮本がどのようにしてクリスチャンになったのかを訊いてみたいと思った。愛作が口を開く前に宮本は自分がクリスチャンになった証を愛作に語り出した。一年の時に人間関係に疲れ、人を信用できずにいたこと。そ

の中で聖書研究会のチラシをもらい参加したこと。先輩が自分に対して親身に接してくれたこと。聖書の人物が

まさに自分と重なり、聖書はまさに自分のことを語っていると確信したこと。愛作は宮本の証を聞いて羨ましく思った。宮本さんは自分とは何かが違う。自分にはないものをもっている。しかし、それが何かは分からなかった。

4

宮本隆の救いの証を聞いた愛作は羨ましく思った。自分もあんな劇的な回心をしていたらもっと信仰生活が違っていただろうと思った。同時に、愛作は由香に言われた「何でクリスチャンなの」という問いについても考えていた。もしも自分の親がクリスチャンではなく、イスラム教徒だったら自分は今ごろクリスチャンではなく、イスラム教徒になっていたのだろうか。

愛作は宮本と一緒にK G Kの祈禱会に参加した。十数名の学生が集まっていた。その日はK G Kの主事による『学生の伝道』という本を使い学びをしていた。浜根主事はこう語った。

「なぜ学内で聖書研究会をするのでしょうか？聖研は何のために、誰のためにするのでしょうか？」

愛作はそれまであまり話に集中していなかったが、その言葉だけには反応した。なぜ学内で聖研をするのか？それは慰子から手紙をもらった時から疑問に思っていたことだった。日曜日に教会に行くだけで十分だと思っていた愛作は、学内でクリスチャンが集まって聖書を読む意義がさっぱり分からなかった。聖研には参加したものの、ずっと関わりようとは思っていなかった。丁寧な手紙をもらった手前、まったく無視はできなかった。だが、一回参加してやめたいように思っていた。K G Kの祈禱会も宮本が熱心に誘ってくれたこともあり断りきれなかった。なぜ学内で聖研をするのか、そんなの自分には関係ない。熱心なクリスチャンが好きでやっただけだろう。その程度にしか思わなかった。そんなことを考えているうちに学びは終わった。その後は祈禱会の時間になった。愛作は宮本から「ミラクル」という冊子を渡された。それを見ると、様々な学校の祈禱課題などが掲載されていた。

「それではA大お願いします」

司会者にそう言われて、宮本はみんなの前で話し出した。

「感謝の報告として、皆さんに祈ってもらっていた相田愛作君が先日の聖研に参加してくれました。そして今日

は祈禱会にも来てくれました」

宮本がそう言うと、ある学生が拍手をした。それに続いてみんなが拍手をした。

「愛作君、自己紹介してもらえますか？」

司会者の突然の言葉に愛作は焦った。愛作が自己紹介をした後に、その場にいた他の学生も自己紹介をした。人数が多すぎてまったく覚えられなかったが、いろんな学校の学生が参加していることだけはわかった。

それぞれの学校、委員会の祈禱課題の分かち合いが終わり、ペアになって祈ることになった。愛作はM大二年の中山献（ささぐ）と一緒に祈ることになった。

「よろしく」

献はにこやかにそう言うと愛作と握手をした。

「初めての祈禱会でよく分かんと思うけど、あまり緊張しなくていいからな。このミラクルを見ながらみんなで互いの学内活動のために祈るんだ。他にも個人的な祈禱課題を祈り合うんだ。何か祈禱課題はある？」

「僕のですか：？」

「ああ。愛作個人の祈禱課題、何かある？」

愛作はどのように言われて何と言っていいか戸惑った。別段、健康も悪くないし、困ったこともない。祈禱課題と言われても何を言っているのか分からなかった。

「特になければ別にいいよ」

献は黙り込んでいる愛作を氣遣って言った。

「あ、はい。特に：」

「じゃあ、俺のために祈ってもらっていい？祈禱課題は、学校で祈り会を始めたんだけど、まだ俺一人しかいないから一緒に活動をする同業者が与えられるように祈ってほしい」

「一人で活動してるんですか？」

「ああ、今は一人で祈り会をしてるんだ。といっても、時々主事や他の学校の人が来てくれるから、いつも一人ってわけじゃないんだけどな」

愛作は献がたった一人で活動していることに驚いた。そこまでして学内活動をする理由はなんだろうと

思った。

献は何も祈禱課題を挙げていないのに愛作のために熱心に祈った。学校生活、信仰生活が祝されるようにと祈った。初めて会った自分のためにまるで以前から知っている者のように祈ってくれたことに愛作は感動を覚えた。

祈禱会後に愛作は数名の学生と食事をした。浜根主事も一緒だった。

「愛作君、今日はよく来たね。みんなで祈ってたよ。愛作君のことは教会の近藤先生から聞いてたよ」

愛作は自分の知らないところで、多くの人が自分のことを覚え祈っていたということに驚いた。この人たちはなんでこんなに熱心なんだろうか？なんで大学生になってまでこんな活動をしているんだろう。せっかく大学に入ったんだからもっと自由に遊んだり、バイトしたりすればいいのに。

食事中、隣に座った宮本が主事と話をしていた。

「浜根さん、今日の『学生の伝道』の学びで改めて学内で聖書を読む大切さを痛感しましたよ」

「そっかあ、それはよかった」

「学内でクリスチャンじゃない友人と一緒に聖書を読むことは、神様がその友人の魂を捕らえる機会を提供しているんですよ。僕も学内の聖研がなかったらクリスチャンになっただけじゃなかったから、ほんとにA大の先輩たちが活動してくれて良かったです」

嬉しそうに話す宮本の顔は輝いていた。

「これからは愛作も一緒に学内活動しような」

宮本の言葉に愛作は思わず「はい」と答えていた。

K G Kを通して愛作は多くのクリスチャンの友人ができた。愛作の出席教会には愛作以外に学生はいない。そのため、同世代のクリスチャンとの交わりは大いに励まされた。一回きりの参加にしようと思っていたA大の聖書研究会やK G K祈禱会は休むことはあっても、継続して参加するようになった。愛作は同じ大学の宮本隆やM大の中山献から多くの刺激を受けていた。特に献は歳が一つ違いということもあって話しやすかった。献の方も愛作に信仰生活について鋭い質問をすることがよくあった。

「愛作、お前には救いの確信ってあるか？」

「救いの確信？それどういふこと？」

「今日、死んでも天国に行ける確信はあるか？」

「今日死んだら？そうだなあ、ちよつと無理かも」

「おい、お前大丈夫か？何で無理だと思ふんだよ」

「なんかさ、うまく言えないけど、最近聖書もあんまり読んでないしさ、信仰的にはちよつとダウンしてる感じがするんだ。小学生の頃に一応洗礼は受けたんだけど、あの頃は純粋だったからな。今では教会のキャンプに行っただ後とかはずごく燃やされた感じはするけど、数週間経つとまたいつもと変わらない生活に戻っちゃうんだよ」

「なるほどな。その気持ちはよくわかる。じゃあさ、愛作は自分の罪が赦されてる確信はあるか？」

「それも微妙だなあ。よくないと思っても、毎日同じ失敗ばかり繰り返しちゃうし……」

「お前の信仰生活の土台って何だよ？」

「土台？」

「そう。土台」

「なんか土台がないような気がするなあ」

「さっきから愛作の話聞いてると、『感じがする』とか、『気がする』とかばっかりだな」

愛作は献の鋭い指摘に返す言葉がなかった。

「そもそもお前、ほんとにクリスチャンか？」

献は齒に衣を着せない。それが時に人に誤解を与えたり傷つけることもあるが、献に悪意がないことはわかってるので愛作は献を嫌いにはならなかった。しかし、この言葉は強烈だった。

「正直なところ、それがよく分からないんだ。以前も学内聖研に参加したとき、クリスチャンじゃない人になり『なんでクリスチャンなの？』って訊かれたことがあってさ。親がクリスチャンだからって答えたんだけど、『親がクリスチャンじゃないの？』って訊かれたことがある。親がイスラム教ならイスラム教徒なの？』って言われて答えられなかったんだ」

「そっかあ。その気持ちよく分かるよ。俺は親が牧師だからさ、気付いたら神様の存在も、イエス様の十字架の話も知ってたよ。劇的な回心をしてイエス様を信じたなんて証を聞くと妙に羨ましく思ったりしないか？」

「そうそう。思う思う」

「俺も愛作も考えることは同じだな」

献は笑った。その笑いは決して嫌な笑いではなかった。決して愛作を責めたり、上から目線で馬鹿にするようなものではなかった。むしろ愛作と親身に向き合い、大丈夫だよと語っているようだった。

「献君は『なんでクリスチャンなの？』って訊かれたら何て答える？」

「愛作、答えを急ぎすぎない方がいいぞ。悩め。悩んで悩んで悩みまくれ」

「そんなあ……」

「気持ち悪い声だすなよ。俺も悩んだ道だ。クリスチャンホームで育った者であるなら一度は通らなくちゃならない道だと思っよう」

「そうなんだ……」

「お前、聖書全部読んだことあるか？」

「ないよ」

「じゃあ、まず聖書を読め。今まで教会の先生から聞いたことをもう一度、自分の目で聖書を読んで確かめてみるよ。そして祈りながら聖書を読むことが大事だぞ。聖霊様の助けを頂きながら聖書を読むんだよ」

「聖霊様？聖霊になんて『様』なんか付けるの？」

「おい、お前大丈夫か？お前、聖霊様を何だと思ってるんだよ。ひょっとして聖霊を人格もないただのカミたいに思っていないか？」

「え？そうじゃないの？」

「お前異端か？三位一体を信じてないのか？」

「よく分からんけど一応信じてるつもりだけど」

「聖霊も人格もっているんだぞ。まあ、呼び方は教会によって御霊とか聖霊とか聖霊様とかいろいろあるけどな。

K G Kは超教派の団体だから、言葉使いがたまに違うのに戸惑うことはあるかもしれないな。でも信じている福音の根幹は同じだから、教団や教派が違ってても一緒に学内伝道するという目的のためには協力できるんだ」

「そうなんだあ」

「まあ、とにかくちゃんと聖書読めよ」

愛作は献に励まされ聖書を少しずつだが毎日読むようになった。K G Kの祈禱会で献と会う度に献は愛作に「最近どうだ？」と声をかけた。

愛作はA大の聖研に参加することが以前より楽しみになった。聖研中も以前より積極的に発言するようになった。そんな愛作の変化に宮本、慰子、詩織たちはとても喜んでた。由香も愛作ほどではなかったが、時々聖研に参加していた。

「愛作君、由香ちゃん、今度K G Kの夏期学校があるんだけど参加してみない？」

夏期学校の準備委員をしている詩織が言った。由香は答えをはぐらかした。愛作は参加したいと答えた。愛作は何故自分がクリスチャンであるのか、その明確な答えを探し求めていた。自分も献や宮本、慰子たちのようになりたい、そう思っていた。

6

夏期学校には四十名の学生が参加した。慰子の友人である由香も参加した。夏期学校にはA大からも新たな学生が参加していた。A大の聖研メンバーは決根主事から新たな学生を紹介された。

「ちよーど二週間前に外部奉仕があつて、そこでA大の学生に会つてね。夏期学校に誘つたら来てくれたんだ。

青木光子ちゃんです」

「はじめまして。青木光子です」

緊張している様子が愛作にも他のメンバーにもよく伝わってきた。

「光子ちゃん、よろしくね」

慰子は光子を励ますように大きな声で言った。

夏期学校には普段のK G K 祈禱会に参加していない学生も多く参加した。普段はなかなか名古屋の祈禱会に参加できない静岡、岐阜、三重からも多くの参加者があった。それぞれのグループで集会後にグループタイムが持たれた。初めて会う人がいても、不思議とグループタイムになるとそれぞれが個人的な証をしたり、集会のメッセージで教えられたこと、新たに発見したことなどを自由に分かち合った。愛作はグループタイムの時に、K G Kに関わり始めた経緯などを話し、信仰のことで悩んでいることを率直に分かち合った。グループのメンバーは愛作の話をじっと聞いていた。グループリーダーの山口守（S大四年）は愛作の話を聞き終わると静かに言った。「さっきの集会のメッセージでもあったけど、世界広しと言えども、こんな罪人の俺のために死んでくださったのはイエス様だけなんだよね」

その後に野中優子（K大三年）も共感して言った。

「私がまだイエス様を知らずに自分勝手に生きていたときに、イエス様は私の罪のために十字架で死んでくださったんだよね。イエス様なんて自分には関係ないと言って敵対しているような私のために死んでくださったのは本当に凄いことだと思うの。自分に敵対する者のために死ぬことなんて普通できないよね」

「そうだよ。自分を愛してくれている人のためになら死んでもいいかなって思えるけど、自分を裏切る者のために絶対死ねないよ」

山口守が言った。愛作は集会中に読んだローマ書五章を読み返していた。

しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに對するご自身の愛を明らかにしておられます。

ローマ五章八節

「KGKの夏期学校というのは、夏の期間に多くの学校が集まって一つの大きな学校となって学内活動をするよ
うなものなのよ。だからキャンブって言わないの。あくまでも学内活動の延長としてこの夏期学校があるのよ。
だから今から普段、みんなが学校でやっているように聖研をします」

慰子は夏期学校三日目の聖研の時間にグループのメンバーにそう言った。グループには青木光子も一緒だった。
光子は初めて聖研をした。最初はじっと黙り込んでいたが、慰子が時々「光子ちゃんはどう思う？」と訊くとぼ
つぽつと話し出した。聖研が終わる頃には、だいぶ打ち解けて慰子に当てられなくても自分から話すまでになっ
た。

「聖研って楽しいですね。A大で毎週やっているなんて知りませんでした。後期から参加したいと思います」
光子は嬉しそうに語った。慰子も他のメンバーもそれを聞いて喜んだ。

夏期学校最終日のグループブタイム。中山献のグループにはA大の詩織と由香がいた。夏期学校を振り返りなが
ら由香が言った。

「初めての参加だったけど多くの発見があつてとても有意義な学びだったと思うわ。でも、この日本には年間
三万人以上の自殺者がいるのをみんなは知ってるの？。みんなはそういう人たちのことをどう思ってるの？自
分たちだけこうやって聖書の学びをして自己満足してるわけ？」

由香の突然の言葉にその場が静まり返った。

「みんなは神様、神様って言ってるけど、ほんとに神がいるなら年間三万人の自殺者をどうにかできないわけ？
それにあの9・11のテロだって、世界で今も起こってる戦争だってやめさせることができるんじゃないの？
あまりにも不条理よ。神は天国で私たちの生活を傍観して楽しんでるんだわ」

由香はそこまで言うと黙り込んでしまった。詩織も他のメンバーもどのように答えていいか分からなかった。し
かし、献は由香をじっと見て言った。

「由香ちゃん、俺たちは年間三万人以上いるという自殺者のことを無視なんてしてないよ。むしろ、そういう人
たちにイエス様の福音を伝えたいと願っているし祈ってるんだ。それに神は何もしない、不条理だって言うけ
ど、それは間違ってると思う」

由香が顔を上げ献を一瞥（いちべつ）した。

「本当に不条理なのは、何の罪もない神のひとり子であるイエス様が、戦争を起こすような俺たち罪人のために十字架で死なれたことなんじゃないかな。神様は決して遠くにいる方じゃない。生きる意味も分からずに自暴自棄になって苦しんでいる者のために神様は『悔い改めて生きよ』って俺たち一人一人に語りかけているんだ」

「そうよ。本当に不条理だって言えるのはイエス様だけなんじゃないかな」

詩織が言った。由香は左手首を右手でしっかり押さえながら泣いていた。献もそれを見ながら泣いていた。

7

十月になり後期が始まった。愛作は同じ学科の稲葉、池田と食事をしようとしていた。食事を食べ始めた稲葉が言った。

「おい愛作、お前気分でも悪いのか？」

愛作は手を組み目を閉じ頭をたれていた。

「神様にこの食事を感謝して祈ってたんだ」

愛作は祈り終わると二人に言った。

「祈り？」

稲葉の驚きの声に周囲にいた者たちが何事かと振り向いた。



「今まで黙ってたけど俺、クリスマスチャンなんだ」

「え？そうだったの？」

稲葉と池田は驚いた。池田は咳いた。

「今時奇妙な奴だなあ」

「俺、初めて生のクリスマスチャンに会ったよ。サインでももらいたいくらいだよ。おい、愛作、お前いつからクリスマスチャンになったんだよ？」

稲葉が身を乗り出すようにして言った。

「小さい頃から教会には行ってたんだけどさ、自分が本当にクリスマスチャンだと自覚したのはつい最近だよ。夏に聖書研究会の合宿があつて、それに参加したんだ」

「聖書研究会？そんなサークルがこの学校にあるのか？」

「うん、毎週木曜日に活動してるよ。稲葉も来てみるか？」

「なんか面白そうだな。でも、俺クリスマスチャンじゃないけど行ってもいいのか？」

「うん、全然平気さ。クリスマスチャンじゃない人も来てるよ」

「池田も来るか？」

「俺はいいよ。俺、宗教嫌いなんだ」

「そっか」

愛作はそれ以上何も言わなかった。

「ところでさ、前期試験の結果どうだった？」

池田は話題を早く変えたい様子だった。

「一応、全部パスしたけど、ほとんどCだったよ」

愛作の言葉に稲葉が驚いた様子で言った。

「羨ましい。俺は必修科目を一つ落としたよ」

「学校にほとんど来てないのにその結果か？なんか真面目に学校に来てるのが馬鹿らしくなるな」
愛作はあきれた。正直者が馬鹿を見た気がした。

「でもさ、必修科目だから来年は後輩と一緒に講義を受けるんだよなあ。それは結構きついよ。試験は結構できたつもりだったのになあ。池田にも代筆を頼んでおいたのに何で落ちたのか不思議だよ」

「お前の名前を書くときはわざわざ筆跡まで変えて書いてやったんだぞ。俺の労を無駄にするなよ」
池田が気の毒だと言わんばかりにそう言った。

愛作は池田が以前、「代筆なんかするわけねーだろ」と言っていたのを思い出していた。あれは嘘だったのか？それとも今嘘をついているのか。愛作は池田の顔をじっと見つめた。そして、言語学の一宮先生が「試験ができて講義に出席しない者は必ず落とす」と言っていたのを思い出した。その時、池田がやはり代筆をしていなかったことを確信した。

後期からの学内聖研が始まった。夏期学校に参加した青木光子は毎週参加するようになった。光子は夏期学校に参加して以来、毎週名古屋でもたれているKGGKの祈禱会にも参加していた。光子は同じ学科の友人をよく聖研に連れてきた。そのような光子を見て愛作は触発されていた。かつては自分がクリスチャンであることを友人に言うことができなかった。しかし、夏期学校後は自分がクリスチャンであることを友人に伝えるようになった。それは大きな変化だった。それは夏期学校を通して救いの確信を得たからだだった。また「自分のために命まで捨ててくださったイエス様のことを恥じることはできない。皆さんは福音を恥としないか？」と夏期学校の講師が泣きながら語っていたのを聞いて胸を熱くされた。愛作の内には深い確信と共に喜びがあった。それは一時的な感情によるものではなく、聖書のみことばによる確信だった。愛作は自分の救いの確信を神の言葉である聖書に置くことを学んだ。それによって愛作はますます聖書を読むようになった。夏期学校の同じグループリーダーだった山口守は最低でも一年に一回は聖書を全部通読していると言っていた。自分と同じ学生がそこまで聖書を読んでいるということに愛作は新鮮な驚きを覚えつつ、聖書を読まず、聖書を軽んじていたことを悔い改めた。KGGKの仲間たちとの交わりを通して愛作は急速に成長していった。

聖研後にいつものように宮本隆が食事に行こうと誘った。その日は光子も一緒だった。

「二人は前期の成績どうだった？」

宮本が愛作と光子に訊いた。

「私は般教の自然科学を落としました」

「え？マジで？俺もそれ取ってたよ」

愛作は光子がもっと真面目に講義に出ていると思っただけに驚いた。

「あの先生、京都の有名な類人猿研究所の先生でしょ。私、レポートで『いくら猿を研究しても人間のルーツはわからない。猿を研究して分かるのはそれを創造された神の素晴らしさだ』って書いたのよ。だぶんそれが良くなかったのね」

「光子ちゃん、それは強烈だなあ」

宮本は驚いたが内心嬉しそうだった。

「やっぱり研究者の立場を全否定するのはよくないですよ。でも、私どうしてもあの先生の言うことには賛成できなくて、つい勢いで書いてしまったんです。愛作君は何て書いたの？」

「え？まあ、適当に書いて出したよ……」

愛作は学問と信仰を完全に切り離し、進化論を推奨する教授に媚びてレポートを書いたことを恥じた。

8

アドベントに入り、街中はクリスマスマスムード一色に染まっていた。稲葉は愛作に誘われて聖研に毎回参加するようになっていた。しかし、稲葉が聖研に参加している動機を知って愛作は内心困っていた。

「クリスチャンの女性って魅力的だよな。なんていうか、ちよっと違う気がするんだ。高校の同級生だった美咲ちゃんもかわいかったけど、なんか違うんだよな」

稲葉は初めて聖研に来た日にそう言った。そして青木光子に自分は一目惚れをしたと愛作に言った。

「なあ、愛作、光子ちゃんって彼氏いるのか？」

「そんなの知らないよ」

「てことは、俺にも可能性はあるってことだな」

それ以来、稲葉は毎回聖研に参加するようになった。愛作は複雑だった。そして、そのことを慰子に相談した。

慰子は光子に稲葉のことを伝えてくれた。

「まあ、動機は何であれ、稲葉君が毎回聖研に来てくれているのは感謝なことだよね。彼の救いのために祈って
いこうね」

慰子はそう言った。愛作は素直に祈ることができなかった。それは光子に対して愛作が特別な感情を抱き始めていたからだだった。稲葉の救いのことを心から祈ることができない。稲葉を愛することができない自分。愛作は自分には愛がないことを認めざるをえなかった。

十二月二十日。この日はA大のクリスマス会をした。前半はみんなで食事をした。慰子が寮でシチューを作ってもってきた。参加した者たちは全員、シチューをおかわりした。それほど美味しかった。食事の最中に由香が来た。急いできたせいか、顔が上気していた。

「由香ちゃん、久しぶり！」

詩織が驚いて真っ先に声を掛けた。全員が由香に注目した。慰子からは由香が体調を崩し休学していたことを聞いており聖研のメンバーみんなで祈っていた。

「みんな久しぶり。夏期学校以来ね。ずっと聖研に参加したいと思ってたんだけど、体調を崩しちゃって、実は今休学中なの。でも、今日は慰子に誘われて来たってわけ」

「うん、慰子ちゃんから聞いてたわ。みんなで祈ってたのよ。もう体調はいいの？」

「ありがとう。ずいぶんよくなったわ。でも、まだしばらくのんびり休学生生活を謳歌しようと思ってるの。来年には復学しようと思ってるけどね」

由香は夏期学校の頃のようなツンとした様子はなく、とても落ち着いていた。

「ねえ、由香、みんなに言ったら？」

慰子が嬉しそうに言った。

「あ、そうね。そのために今日は来た様なもんだもんね。えー、実は私、クリスマスに受洗するの」

「えー」

聖研メンバーの皆が叫んだ。

「黙っててごめんね。由香が自分の口からみんなに言いたいから黙ってほしいって言うからずっと黙ってたの」
「驚いた？」

由香はおどけたように言った。愛作は詩織が以前話してくれた夏期学校のことを思い出し、詩織を見た。詩織は目にうっすら涙を浮かべていた。食事中は由香がどのようにして受洗を決意したのかで話は持ちきりだった。由香は夏期学校以前からリストカットを繰り返していたこと、そして夏期学校後に体調を崩し入院したことなどを赤裸々に話してくれた。入院した時には毎日のように慰子が見舞いに来てくれて、いつも帰り際に祈ってくれたと話した。

「そして慰子はいつも聖書の言葉を書いたお手製の葉（しおり）を持ってきてくれたの。最初は正直うっとうしいと思ってたの。私の母は週に二回しか見舞いに来ないのに、慰子は毎日のように見舞いにくる。私ね、そんな慰子を見て憎らしいと思ったの。どうせ私のことを哀れな女だと思って馬鹿にしているに違いないって思ったの。私には慰子の生活が順風満帆のように見えて羨ましかった。慰子の言動すべてが偽善に見えたの。でもね、ある日、看護士さんが慰子が帰った後に『由香ちゃんって本当にいい友達がいて幸せね』って言ったの。それを聞いたとき、うまく言えないんだけど、それまで私の内に凝り固まっていた人への不信感が溶けた感じがしたの。それで、慰子からもらった葉を読んだら、なぜか涙が止まらなくなっ……」

由香は泣き出した。慰子も泣いていた。
「その時ね、夏期学校で聞いた『本当に不条理なのは何の罪もないイエス様が罪人のために死なれたことだ』っていう言葉を思い出したの」

由香の証を聞いた者たちにとってこの日は喜びの日となった。特に由香のために祈ってきたメンバーの喜びは言葉にならないほどだった。

クリスマス会の帰り道、稲葉はいつもより口数が少なかった。

「稲葉、クリスマス会はどうだった？」

「うまく言えないけど、今日初めて思ったよ。聖研には何か俺にはない本物の何かがあるってな」

「本物の何か？」

「ああ、今まで酒飲んだりカラオケ行ったりしてクリスマス会を過ごしていたけど、今日のクリスマス会はなんか

「今までのとはまったく違ってたよ」

「そっか。それは良かった。来週の日曜日、教会のクリスマス会があるんだけど来てみるか？」

「おう。いいな」

愛作は嬉しかった。慰子の言うとおり、祈りが聞かれていると思った。主が祈りをきかれ、主が失敗もする弱い自分さえ用いられ、ご自身のご栄光を現されることに愛作はおそれを覚えた。主は確かにおられるのだ。愛作は稲葉を愛そうと決心した。

9

愛作は春期学校準備委員をすることになった。

自分は夏期学校を通して信仰の再確認をした。多くのものを夏期学校を通して与えられた。今度は主に任せ、人に仕える者でありたい。愛作はそのように思い、宮本隆に勧められKGGK会員となった。同じ時期に同じ大学の青木光子も会員となった。

十二月総会では二人の他にも四人の学生がKGGK会員として承認された。総会では次年度の委員が承認された。愛作は春期学校準備委員として、光子は全国協議委員として奉仕することが承認された。愛作にとつて初めて参加するKGGK総会は驚きの連続であった。総会資料から議事進行までのすべてを先輩たちが担っていた。自分の知らない背後で多くのKGGK会員たちが奉仕を担い、地区活動を支えていることに感動した。四月から十二月までの地区活動の感謝報告と反省点を会員全体で意見交換した。また活動が停滞している三重での活動を励ますために何ができるかと話し合われた。自分たちの学校だけでなく、他の学校の活動のために真剣に話し合われた。その時、中山献が言った。

「俺は今まで学内で一人、祈り会をしてきたけど、いつも会員みんなの励ましがあつたからここまで続けられたと思う。後期からは新たにクリスマスチャンが与えられて今は二人で祈り会をしています。だから三重での活動のために何かをしたい」

「みんなと一緒に学校に行こうよ。そして、祈り会をしようよ」
慰子が言った。

「俺、車出すよ」

山口守が言った。浜根主事も嬉しそうに「もちろん僕も車出すよ」とそれに賛同した。

総会の中で全国協議委員（全協）は他地区や世界（IFES）の働きを紹介した。また夏に東京で行われたEARC（東アジア地区大会）に参加した会員からその報告がされ、参加者の証し集が配布された。愛作はそのような日本全国、そして世界でのKGGK活動を聞きながら、改めて自分はA大に入学したことの不思議さを感じた。入学当初は第一希望でなかった故に学校生活に不満を抱き、学校を辞めようかとも思っていた。しかし、KGGKを通して自分の信仰を問われ、主が自分をA大に遣わされたのだと知った。最初はそれを受け入れることができなかつたが、今はそれを信仰をもって受け止めることができている。自分はこの日本という国、そしてこのA大という地に遣わされているのだ。その主の召しに精一杯応えていこう。愛作は決意を新たにされた。

A大の後期試験は二月から始まった。愛作は前期よりも熱心に勉強をした。

「学内活動に熱心でも学業をおろそかにしてたら本末転倒だよ。神様は僕たちに宣教命令と同時に文化命令も与えておられるからね」

前期試験の結果について話した時に宮本隆は愛作と光子にそう言った。

「文化命令？何ですかそれ？」

「創世記一章に『生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすすべての生き物を支配せよ』ってあるよね。神様はご自身の造られた世界を人に委ねて、神様の御心になうように管理するように言われたのさ。つまり社会でクリスチャンとしてよく働くことも神様の御心なんだよ。ということは、学生であるなら自分の専門分野をよく学んで、その分野で神様の御心は何かって考えることは文化命令に従うことだと思うんだ」

愛作はそれまで何となく講義に出て、適当に学び、単位が取ればそれでいいと思っていた。しかし、宮本の話を聞いて、自分がいかに学問と信仰を切り離して考えていたかを悔い改めた。

試験を終え春休みに入った。愛作は春休みを使って聖書をじっくり読もうと思った。一年で一回は聖書を通読すると言った山口守に触発されて自分も通読したいと思った。そのことを話したら守は聖書通読表を愛作にくれ

た。

「読んだ箇所を塗りつぶしていくんだ。結構たのしいぞ」
守は嬉しそうに言った。

愛作は近所の図書館で聖書を読んでいた。旧約聖書から読み始めていたが、出エジプト記二十五章から聖所や祭司に関することが始まり段々辛くなってきた。

「最初は意味が分からなくても、くじけず読み進めていくといいよ。どうしても辛くなったら、読みやすい新約聖書を読んだり、詩篇や箴言を読むといいよ。ずっとレビ記や民数記、よくわからない預言書読んできると辛くなるだけだからな」

守の言葉が思い出された。

愛作は聖書を閉じ、休憩室に行った。二月の平日だけあって人は少ない。休憩室に行く途中に洋書コーナーの脇を通った。すると突然「ああー」と小さく叫ぶ声が聞こえた。同時に大きな本が床に落ちる音がした。愛作は気になって音のした方へ行った。そこには床に散乱した本をあたふたと片付ける女性の後姿が見えた。

「大丈夫ですか？」

愛作は小さな声で囁いた。

「え、ええ」

そういうとその女性は愛作の方に振り向いた。

「あー」

思わず愛作は叫んだ。そこにいたのは高校の同級生、美咲だった。美咲も驚いて言った。

「愛作君じゃない」

愛作は胸が高鳴った。そのことを美咲に気付かれないように黙って美咲が落とした本を元の位置に戻した。そして、小さく「じゃあ」と言っ立去ろうとした。するとすぐに美咲が愛作を呼び止めた。

愛作は戸惑いながらも内心嬉しかった。

春休みの図書館で愛作は約一年ぶりに美咲と再会した。美咲は愛作が高校時代、心ひそかに思いを寄せていた女性だった。図書館の休憩室で缶コーヒを飲みながら愛作と美咲は久しぶりに話をした。

「久しぶりだね。東京から帰ってきたの？」

「うん。二日前に帰ってきたの。安く帰ってこようと思って夜行バスを使ったんだけど、全然眠れなくて昨日は一日中寝てたわ」

「それは大変だったね。どう？大学は？」

「楽しいわ。東京での一人暮らしは楽じゃないけどね。愛作君はN大だっけ？」

「いや、A大だよ。N大が第一志望だったけど、落ちたんだ。でも、今ではA大で良かったと思ってるんだ」

「そう。なんだか楽しそうね。愛作君のその笑顔を見たらそれがよくわかるわ。大学では何かサークル入ってるの？」

愛作は聖書研究会に入っていること、そしてKGGKにかかわっていることを伝えるべきか一瞬迷った。それは言うのが恥ずかしいとかではなく、美咲にどこまでそのことを理解されるか分からないと思ったからだ。だが、愛作は答えた。

「聖書研究会っていうサークルに入ってるよ。俺、クリスマスチャンなんだ」

「え？そうだったの？ひよっとして、えーと、えーと、そうそう、KGGKって知ってる？」

美咲の口からKGGKという言葉を聞くとは思ってもよらなかった。愛作は美咲が目の前にも知ること、美咲の口から『KGGKって知ってる？』と聞くのも夢ではあるまいかと思った。

「美咲ちゃん、何でKGGKを知ってるの？」

「私ね、T大のKGGKに参加してるの」

「え！ほんと？美咲ちゃん、クリスマスチャンなの？」

「まだ違うんだけど、友達がクリスマスチャンで時々参加してて、夏には夏期学校に参加したのよ」
愛作はますます夢のように思われた。

「えー、そうなの？それはびっくりだな。実は俺は東海地区のK G Kに関わってて、夏には東海地区の夏期学校に参加したよ。でも、ほんと驚いたよ。美咲ちゃんがK G Kに関わってるなんて。それで、関東地区の夏期学校はどうだった？」

「百人くらい参加者がいて、すごく緊張したわ。だって、その中でクリスチャンじゃないのって十人くらいしかなくて、他はみんなクリスチャンでしょ。初日は、なんか来るところじゃなかったかなあって思ったの。でも同じグループのみんながとってもいい人たちばかりですぐに打ち解けちゃったわ」

「へえ、それはよかったね。T女大って、ミッシヨンスクールでしょ？礼拝とかあるの？」

「うん、毎週やってるよ。一年生はみんな必ず出るように言われているの」

「どう？礼拝は？」

「私好きよ。子どもの頃、おばあちゃんがクリスチャンだったからよく教会に行ってたの。教会のクリスマス会のことによく覚えてるわ。中学に入ってからは部活が忙しくなって全然行けなくなったけどね。高校三年の頃、おばあちゃんが亡くなって教会で葬儀があったの。それで久しぶりに教会に行っただけだね、驚いたことに牧師先生や婦人の人たちが私のことを覚えてくれてたの。葬儀もすごく感動して、キリスト教のことはよく分からないけど、すごくいいなあって感じたわ」

「そっかあ。同じクラスだったのに、おばあさんが亡くなったこと全然知らなかったよ。大変だったね」

「愛作君がクリスチャンだってことも知らなかったわ」

「そうだよね。俺、隠れキリシタンだったから」

愛作はニコッと笑った。美咲も微笑んだ。

「愛作君は何でクリスチャンになったの？」

愛作はいっしか由香に聞かれた質問のことを思い出した。あの時は答えられなかった。しかし、今は確信をもって答えられる。

「俺は……」

「おー愛作じゃん」

愛作が答えようとした時、稲葉が数メートル先のトイレから出て来たところだった。美咲は稲葉だと気付くと「こ

めん」と小さく言つてその場を立ち去つた。愛作は美咲の後ろ姿を見ながら、怒りを覚えていた。何で稲葉がいるんだよ！

「おい、愛作シカトすんなよ」

稲葉は愛作が美咲と話していたことに気付いていなかった。

「おお、稲葉か……」

「誰と話してたんだよ。もしかして彼女？」

「いや、別に……」

愛作は美咲ともう会えないかもしれないと思つた。そう思うと急に悲しくなつた。やっぱり俺は美咲ちゃんのことまだ好きだったんだ……。でも、光子ちゃんのこととも好きではなかつたか……。そう思うと、自分の心の移り変わりの速さ、そしていい加減さが嫌になつた。

「愛作、お前が図書館にいるなんて珍しいな」

「そういうお前も珍しいぞ」

「まあな。でも、なんか今日はなぜか知らんが、図書館に行こうと思つたんだよ。お前もか？」

「ああ。そんなところだ」

そんなことを話していたら、さっきまでの稲葉への怒りが不思議と和らいでいた。

「なあ、稲葉。お前、聖書って持ってたか？」

「何だよ急に。この前、お前と一緒に教会に行った時に小さな聖書お前がくれただろ。忘れたのか？」

「あ、そうだったな。ごめんごめん」

「なんか、お前おかしくないか？」

「いや、いつもと変わらないよ」

愛作はそう言うのと缶コーヒーを一気に飲み干した。

11

あの図書館で美咲と会つて以来、愛作はバイトのない日は必ず図書館に行った。しかし、美咲と会うことはで

きなかつた。おそらく東京に帰ったに違いない。愛作はそう自分に言い聞かせた。そして祈った。美咲が丁女大の聖研につながることを。教会につながることを。そして美咲がイエス様を信じ救われることを。そして、いつかまた……。

春期学校の最後の夜には、「卒業生を送る会」が行われた。卒業生は三人いた。A大の宮本隆、詩織、そしてS大の山口守だった。東海地区の「卒業生を送る会」は毎年恒例となっており、愛作たち準備委員は長年のやり方を踏襲することにした。その長年のやり方とは、卒業生に宛てて、後輩が手紙を書き、みんなの前で朗読するのだ。朗読のバックではピアノの生演奏がある。

詩織には同じ大学の由香が手紙を送った。

「私の良きお姉さんの存在であつた詩織おねえ。」

由香の手紙はそのような出だしで始まった。そして、夏期学校で同じグループだったこと、自分がみんなに対して怒りをぶつけた時も優しく包み込んでくれたことへの感謝が綴られていた。詩織は手紙が朗読されている最中、ずっと泣いていた。

山口守には中山献が手紙を送った。

「守君と最初に出会った時の言葉を今でも忘れません。それは俺がまだ入学する前の春期学校。グループタイムで言われた言葉。『お前、ほんとにクリスチャンか?』その言葉は俺にとって衝撃的だった。牧師家庭に生まれた俺は当然、自分はクリスチャンだと思っていました。教会の人はみんな、俺が良きクリスチャンであるようにという無言のプレッシャーをかけてきました。それに反発したい気持ちを抑えながら、表面上は立派なクリスチャンを装っていました。でも、守君の言葉を通して、自分は何を信じているのかを考えさせられたのです。それ以来、俺の求道生活は始まりました。俺は守君に聖書の読み方、クリスチャンとして歩むとはどういうことかを教えられました」

愛作は献の手紙を聞きながら、献が自分に「お前、ほんとにクリスチャンか?」と言われたことを思い出した。そして、妙に献の証しに親近感を覚えた。

宮本隆には愛作が手紙を読んだ。

「初めて宮本さんと聖研で会った日、宮本さんは食事をおごってくれました。宮本さんは聖研に男のメンバーが与えられたことを心から喜んでいました。でも、今だから言いますが、その時はここまで聖研やK G Kに関わろうとは思っていませんでした。K G K 祈禱会に行ったのも、宮本さんに食事をおごってもらったこともあって、断りきれなかったんです。俺が第一志望でない今の学校に入ったことで悩んでいた時に宮本さんに言われた言葉が今でも忘れられません。それは『遣わしてくださった主に従うことが本当の派遣意識だ』という言葉でした。俺は通りであってもなくても、そこで主に信頼して主に従って生きることが派遣意識だ』という言葉を聞いた。俺はそれを聞いて、悩んでいたことが吹っ切れて、学内の聖研やK G Kに深く関わっていいこうと決心しました」

宮本は嬉しそうに話を聞き、最後に目をこすった。

卒業生からも後輩たちへ贈る言葉を言うことになっている。ある意味、これは「K G Kスピリット継承の儀」とも言える時間だった。

詩織は涙を流しながら、いかにK G Kを通して良き友を与えられたかを語った。そして、由香が救いへと導かれるまで、多くの人と一緒に祈ってきたこと、その祈りに確かに応えてくださった主がいかに真実であるかを語った。

守はたとえ一人であったとしても、学内で祈り始めることの大切さを訴えた。守が入学した当初はS大には活動がなかった。しかし、ずっと祈り続けてきた。そして四年になったときに、クリスチャンの新入生が二人与えられ、学内祈禱会、聖研が始まったことを証した。祈りは積まれるのだと守は言った。祈りは決して無駄には終わらない。自分が在学中にたとえグループができなかったとしても、後々の後輩のために祈る者であれと訴えた。

最後に宮本が語った。

「僕はこの四年間とても複雑な気持ちでした。そして、今もその気持ちは変わらず、それをどうすればよいのかも分からずただ祈るばかりです。僕は毎週、地下鉄を使って教会に行っています。伏見駅で乗り換えるのですが、電車を降りて鶴舞線に乗り換えるとき、僕は大勢の人とすれ違いますが、そして、思うのです。自分は今から教会に行く。しかし、目の前の大勢の人はどこに行くのだろうか？自分は永遠の命をいただいている。しかし、目の前の人々はイエス様を知らずに滅びへと向かっているのではないか。皆さんはどのような滅び行く魂への憂いを感じていますか？」

愛作は宮本のその言葉に心刺された。学内ですれ違う人々、街中ですれ違う人々。自分はそのような人々のためにどれだけ主の御前に祈ってきたらう。どれほどその滅び行く魂を憂えたたらうか。結局、自分のことしか考えていなかったのではないか。宮本のその言葉はこれから学内活動をする自分を強く動機付けた。

何のために祈り会をするのか。それは魂の救いが主のみが対処できる領域だからだ。何のために聖研をするのか。それは、生きた神のみことばこそ、人を根本から変える力があると信じるからだ。愛作の心の内に、稲葉、池田、そして同じ学科の友人、知人の顔、そして美咲の顔が浮かんだ。そして祈った。主よ。遣わしたまえ。こんな汚れた罪人の私を哀れみ、そして主の働きのために用いたまえ。

愛作の新たな歩みが始まる。学校に帰ろう。自分の遣わされたところへ福音を携えて帰ろう。そして、K G K しよう。

12

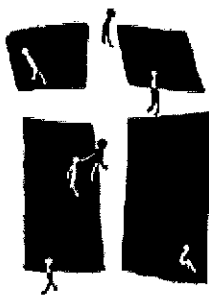
バス停から講堂までの登り坂は桜色に染まっていた。その登り坂の側道には両手いっぱいサークル勧誘のチラシを手にした上級生たちが待ち伏せている。一人でも多くの新入生にチラシを配ろうとどのサークルも側道に陣取り、肩と肩がぶつかるくらいの混雑ぶりだった。

「じゃあ、みんな集まって。まずは祈ろう」

愛作が言った。愛作の他には四年生の慰子、由香、二年生の光子、そしてM大三年の中山猷がいた。

「神様、今から新入生に聖研のチラシを配ります。どうぞ今から配るチラシ一枚一枚が主によって用いられ、新入生の目に留まりますように。新入生のクリスチャンがチラシを見て、この聖研に関わってくれますように。」

また、聖書に興味のある新入生がチラシを見て、この活動に参加してくださいますように。そしてこの活動を通してイエス様と出会うことができるように導いてください。イエス様のお名前によってお祈りします。アー



メン」

新年度になり、愛作は慰子に代わってA大聖書研究会のリーダーになった。春期学校で宮本の証を聞いた愛作は、学内にいるイエス様を知らない多くの学生たちに福音を伝えたいと心が燃やされた。そして、聖書研究会の存在を広く、多くの人に知ってもらいたいと思った。そして、入学式で聖研のチラシ配りをすることにした。K G Kの鶴舞祈祷会でこのことを祈ってもらおうと、M大の中山献が自分も手伝うよと申し出てくれた。

バスが二台続けて正門に入ってきた。バス停付近には多くの学生が陣取っていた。愛作、慰子、献の三人はバス停と講堂の中間地点の所でチラシを配ることにした。一方、光子と由香は講堂付近で配ることにした。突然、強い風が吹き、桜と共にチラシが空に舞った。それがまるで合図であったかのように、バス停からおびただしい数の新入生が現れた。黒や紺色のスーツを着た新入生たちは押し流されるようにしてこちらに迫ってきた。

愛作たちの前に新入生が通りかかるときにはすでに、新入生は多くのチラシを両手に抱えていた。その上に半ば強引に次から次へとチラシが置かれていくのだった。チラシを受け取る新入生たちは困った顔をしながら、されるがままにチラシを受け取らされていた。

「入学おめでとございます。聖書研究会です。聖書を読んだことありますか。……え？ほんとですか？じゃあ、ぜひ来て下さい」

次から次へと押し寄せてくる新入生に慰子は丁寧な声かけをしながらチラシを配っていた。愛作は慰子のその様子を見て、改めて慰子という人物を尊敬した。愛作は次から次へと押し寄せてくる新入生にとかくより多くチラシを配ろうと努めた。しかし慰子は違った。自分の接することのできる範囲で、一人一人に声をかけ、新入生と短くても会話をしながらチラシを配っていた。慰子にとっては、たくさんチラシを配ることよりも、少しでも人格的な触れ合いをすることを大切に行っているのだと愛作は思った。

愛作たちは一時間程チラシを配った。講堂付近で配っていた由香と光子も持っていたチラシをすべて配り終えて戻ってきた。光子が嬉しそうに言った。

「私ね、クリスチャンの新入生に会ったよ。女の子で、ぜひ参加したいって言ってくれて、すごく嬉しかった」

「え？ほんと！すごいじゃん！」皆が喜んだ。

「クリスチャンには会えなかったけど、聖書に興味があるっていう男の子がいたわよ。聖研に来てくれるといい

けど」慰子がそう言った。

「今日、手伝いに来て良かったよ。チラシを配りながら改めて思ったんだけどさ、聖研って、他のサークルとはまったく違うよな。聖研ってさ、唯一、魂の救いのためにあるサークルだよな。他のサークルのほとんどは自分たちの楽しみのためにやってるだけだもんね」

献がそう言うと、由香が感心して言った。

「献君って、いつつも私にヒットすることを言うよね。確かに献君の言うとおりね。この聖研がなかったら、私はクリスチャンになってなかったと思うわ。だって、教会にはなかなか敷居が高くて行けなかったけど、聖研は慰子もいたから来やすかったの。そう思うと、聖研の存在って大切よね」

そこにいた皆が頷いた。そして、再度皆で輪になってお祈りをした。愛作はこれから始まる学内活動で、主がどのような素晴らしい御業をなしてくださるだろうかと思像し胸が高鳴った。主よ、我らの聖書研究会を通して栄光を現したまえ、そう祈った。

13

今年はこの学校にもクリスチャン新入生が与えられ、四月下旬のK G K 鶴舞祈禱会には新入生が五人参加した。この日は浜根主事が担当する『学生の伝道』の学びの日だった。

「学内活動を始める上で大切なこと、それは『大きく祈って、小さく始める』ということですよ。主にあって大きなビジョンを掲げて祈りましょう。でも、活動は小さく地道に始めましょう。いきなり大きなことをしようと思わず、まずは少人数で祈り会を始めましょう。祈り会は活動の生命線です。また原動力です。祈り会によって、学内活動が方向付けられていくのです。聖研を始めようとする前に、まずは祈り会を始めましょう。K G Kの六十年の歴史の中で、D P Mというものがされてきました。これは例日祈禱会というものです。毎日、学校で集まって祈るといふものです。最近では、D P Mをしている学校がすごく減ってきているのが残念です。祈りには力があること、祈らずして活動は前進しないということを私たちはもっと主の前に謙虚に認めていくことが大切です。祈り会と聖研の両輪を大切に学内活動をしていきましょう」

愛作は学内でのD P Mを始めてみたいと思った。しかし、日々の「静思の時」でさえ毎日できていない愛作には、

学内でのDPMをすることは無理のように思えた。

「愛作君、A大でもDPM始めようよ」

祈禱会后、同じ大学の光子がそう言った。

「実はさ、俺も始めたいと思ってたんだ。でも、毎日って、正直できるかどうか自信がないんだよな」

「リーダーがそんなこと言ってるってどうするのよ。一人でやろうとするからいけないのよ。みんなで励まし合っ
やればできると思うわ」

「そうだよな。じゃあ、今度の聖研の時にみんなに相談してみよう」

「私は協力するわ。慰子さんも由香さんもきつと協力してくれるわよ」

四月最初の聖研には聖書に興味があるという加藤悟という学生が参加した。愛作、光子、慰子、由香たちはこ
んなにも早く新入生の求道者が来てくれたことに内心驚いていた。この日はK G Kブックレット『Straight from the
Bible』キリスト教・そのエッセンス』を用いて「キリスト教の示す神」について使徒十四章から聖研をした。

「加藤君は聖書読むのは初めて？」と愛作。

「高校生の頃に興味があって、読んだことはありましたが、今日読むところは初めてです」

「高校生の頃はどこを読んだの」と慰子。

「マタイの福音書を読んだんですけど、カタカナの人名ばかりで、よく分かりませんでした」

「そうよね。マタイの福音書はユダヤ人に対して書かれてあるから、ユダヤ人の系図からは始まっているの。最初
は『ルカの福音書』から読むといいわ。ルカはユダヤ人ではない異邦人、私たちも異邦人なんだけど、異邦人
に対して書かれた福音書だから読みやすいよ。ルカ自身も異邦人なの。今日読む使徒の働きはルカの福音書の
続編でもあるの」

慰子の説明を聞いて加藤悟は目を丸くして驚いた。

聖研の中で悟は「神がいるなんてどうやって証明できるのか。キリスト教も多くの宗教の中のひとつで人間が考
え出したものではないのか」と次から次へと疑問に思っていることを話した。愛作は悟を見て、彼が今まで訊き
たくても誰に訊いたらいいのかわからずに苦しんできたのだと思った。そう思うと、悟の質問で聖研はかなり脱

線もしたが、今回はそれでいいと思った。彼に対して慰子や光子、由香、それに愛作自身も丁寧に、そして精一杯答えた。

「ここに來ている人はみんな真面目ですね。それに親切ですね」

悟がそう言うのと、由香がニヤニヤしながら言った。

「そうでしょ？私も初めて聖研に來た時、そう思ったの。どうして聖研のメンバーはこんなに真剣に人生の意味やら、神について語り合っているんだらうってね。それに意地悪な質問をしても、真剣に、誠実に答えようとしてくれたのよ」

「こうやって、悩みを馬鹿にせず真剣に分かち合える場があるっていいですね。僕クリスチャンじゃありませんけど、來週もまた参加していいですか」

「もちろん！」メンバー全員が口を揃えて言った。

愛作はDPMをしようと思った。悟の救いのために、まだ見ぬ多くの求道者のために祈ろうと思った。祈らずしてこの活動はできない。唯一、魂の救いのためのサークル。祈りなくして前進はないのだ。

14

愛作はA大でDPMをすることをメンバーに相談した。

「DPMって、ほんとに毎日のわけ？」

由香が驚いて言った。

「うん、毎日だよ。時間は朝か、お昼かのどちらかで二、三十分を考えてるんだけど、どうかな？」

「朝はバス」と由香。

「でも、お昼にすると、クラスの友人たちと一緒に食事ができなくなっちゃうから、私は朝がいいな」

「光子ちゃんの言うとおりにね。私もするなら朝がいいと思うわ。一日を聖研のメンバーたちと祈って始めるなんて素敵じゃない」

「慰子、そんなこと言ってるけど、あなた毎日學校に來てるわけじゃないでしょ。就活だってやってるんでしょ？」と由香。

「そうだけど、やっぱり愛作君が言うとおり、この活動は祈りなくして前進はないと思うの。魂の救いのために私たちができることは、やっぱり祈りなのよ。以前、浜根主事が『魂への憂いが祈りを生む』って言ってたわ」

「この活動は、俺たちの力だけでするものじゃないんだよ。神様に祈りつつ、推し進められていくものなんだよ。悟君が聖研に来てくれてるし、彼の救いのために俺たちは真剣に祈っていく必要があると思うんだ」

「そこまで言うなら、私は反対はしないけど、毎日は参加できないわ。去年の後期に休学してたから、その分を取り戻すのに大変だし、就活もあるのよ」

「由香さん、私だって寝坊するかもしれないから、わからないですよ」

光子がそう言うと、慰子も照れながら「私も」と言った。しかし、愛作はリーダーとして毎日参加しようとした。DPMは一限が始まる前の八時半から、聖書研究会の顧問である山田先生の研究室ですることになった。初めてのDPMにはメンバー全員が集まった。最初に賛美と箴言を一章朗読した。その後、互いの祈禱課題を短く分かち合い、互いのために、そして聖研の活動のために祈った。

「講義が始まる前の学校って静かねえ。こんな静かな中で賛美して、一緒に聖書を読んで祈り合えるのって本当に恵みねえ」

慰子は感激していた。光子も深く頷いて言った。

「一日を聖研メンバーと一緒にこうやって祈って始められるのって嬉しいですね」

翌日のDPMには由香は参加しなかった。由香からはメールで「寝坊した、ごめん」と慰子に連絡があった。昨日と同じように賛美と箴言の朗読の後に互いの祈禱課題を分かち合った。

「実は今日、会社の面接が午後からあるの。みこころならその会社に決まるようにお祈りください」

「え？じゃあ、今日はDPMだけのために学校に来てくれたんですか」

慰子は愛作に「そうよ」と答えた。

「私がいつも一緒にいる友人の亜希子、聡美、優子が聖研に参加できるようにお祈りしてください。去年、教会のクリスマス会に三人は来てくれたの。でも、それ以来、教会には来てなくて、聖研にもずっと誘っているからお祈りください」

「僕の友人の稲葉のためにお祈りください。去年の聖研のクリスマス会に来てくれた稲葉です。今週の聖研にも

久しぶりに参加してよって誘ってるからお祈りください」

愛作たちは互いのために祈り、聖研にクリスチャンの新入生、求道者が与えられるように、そして聖研に来てくれている悟の救いのために心を合わせて祈った。

DPMを初めて二週間が経った。由香はその後、一回参加しただけだった。光子と慰子は時々参加できないとさがあり、愛作一人だけでDPMをした日が一回だけあった。一人で箴言を読み、メンバーのために祈った。静かな研究室の中で一人聖書を読み、祈りながら、愛作は主もここにおられるという平安に満たされた。DPMノートがあり、毎日そのノートに日付と読んだ聖書箇所、参加者、祈禱課題を短く書くようにしている。愛作はノートに「今日はイエス様と二人で祈り会をしました」と書いた。

DPMのノートを読み返していると、挙げられている祈禱課題がちゃんと主に応えられていることを愛作は発見した。先週の聖研には光子の友人である亜希子が聖研に参加してくれた。また、クリスチャンの新入生から愛作に次回の聖研には参加したいと連絡があった。主は確かに祈りに応えてくれた。

15

梅雨明け宣言が出た翌日のDPMに由香は久しぶりに姿を現した。愛作、光子、慰子もいた。

「みんなお祈りありがとう。昨日ね、会社から通知が来て、内定を頂いたの」

「おめでとございます。由香さん、就活頑張っていましたからね」

愛作がそう言うやいなや、光子が驚いて言った。

「あれ、由香さん、この前も内定ももらったって言ってませんでしたか」

愛作はその時、慰子の顔を一瞥した。慰子の顔が一瞬暗くなったように愛作には見えた。

「そうそう。今回ののは二つ目の内定なの。私卒業が半年遅れるから、就活はかなり厳しかったけど、私の実力を認めてくれたのね。会計の勉強を二年のときに必死にやっつて資格をとっておいておかげで救われたわ。ただね、どっちにしようか迷ってるのよ」

「賢沢な悩みですね」

「光子ちゃん、そうでもないのよ。どっちも行きたい会社なの。究極の選択よ、これは」

由香は困ったといいながらも、顔は嬉しそうだった。

慰子の就職活動は由香の比べるにとでも遅かった。面接において多くの学生は「御社が第一希望です」と言つて、複数の会社を同時並行で受けていた。しかし、慰子にはそれができなかった。由香にそのことを話すと、「あなたは真面目すぎる、御社が第一希望ですというのは社交辞令よ」と笑われた。しかし、それは「社交辞令」ではなく嘘だ。クリスチャンとしてこの世の中の常識や慣例に従うのではなく、聖書の基準に従うことが大切ではないかと慰子は思った。自分がK G Kを通して学んだ「福音主義」「全生活を通して証し」というスピリットはそのような生き方のことだと思つた。慰子は決して同時並行で面接を進めることをせずに、一つの会社の結果が出てから、次の会社の面接に行つた。同時並行に面接を進めている慰子の周囲の者たちは次々に内定をもらつていたが、慰子はまだ一つも内定をもらつていなかった。

慰子がこれまで受けた会社は四つだった。金融、出版、教育、不動産の会社だった。そのことを由香に話すと由香は呆れたように言つた。

「あなた、何をしたいの？」

「何って？」

「慰子が受けた会社はどれも業種がばらばらなのよ。まずは業種をしぼりなさいよ。慰子の就活の仕方じゃいつまでたつても内定もらえないわよ」

由香のその言葉に慰子は返す言葉がなかった。

その日、慰子は一ヶ月ぶりに教会の祈禱会に出席した。教会の祈禱会で一番若いのは慰子だった。それでも婦人の方や自分の祖父母くらいの年代の方たちとの交わりに慰子はとても励まされ、カづけられていた。祈禱会で進路のことを祈ってくださいと分かち合いみんなに祈ってもらつた。

祈禱会后、帰ろうとする慰子に牧師夫人の万里子が声をかけた。

「慰子ちゃん、いつもより少し元気がないようだけど、どうかしたの？」

慰子は万里子をとでも慕っていた。万里子がこのように声をかけてくれたことで慰子の強張っていた心はほぐれた。

「万里子さん、私、就活する自信がなくなつてしまつたんです」

「面接で何か酷いことでも言われたの？」

「そうじゃないんです。私、就活を今しているんですが、将来的には神学校に行きたいっていう思いもあるんです」「やっぱりねえ。そうじゃないかなあって思ってたのよ。わかった。ひよっとして、三年くらい働いてから神学校に行こうなんて思ってるんじゃないの。それでどうせ、三年で辞めるんだからって思うと、会社を決められない。どう、凶星？」

「万里子さん、私の日記を読んだんですか？」

「慰子ちゃんの言動を見てそう思っただけよ。私も学生の頃、同じように悩んでいたのよ。就職か、それとも神学校かってね。でもね、ある時、所属教会の牧師に相談して言われたの。『働けると思うなら働きなさい。主が本当にあなたをフルタイムの献身に召しているなら、働けなくなる。』ってね」

「そう、つまりフルタイムの道しかないんだって、ある意味神様に追い込まれるのよ。そういう思いじゃなければ、働いた方がいいわ。慰子ちゃんは今、どうなの？」

万里子は慰子をじっと見た。

16

「私は……まだ、フルタイムの献身だけしか道はないとまでは思えませんが」

「だったら、働きなさいよ。神様が本当に慰子ちゃんを召しておられるなら、必ずそのような道に導かれるから」
「でも、私、自分がどのような業種で働いたらいいのかわからないんです。自分が何をしたいのかよくわからないんです」

「慰子ちゃんは「働く」って自分のやりたいことをすることだと思ってるの？」

「駄目なんですか？」

「駄目じゃないけど、仕事ってただ自分のやりたいことだけをするのではないと思うの」

「慰子ちゃん、神様は私たち人間に大きな二つの命令をされているけど、それが何だかわかる？」

「全世界に出て行って、福音を宣べ伝えること、神を愛し、隣人を愛すること、ですか？」

「うん、確かにそれもそうよね。慰子ちゃんは、「文化命令」って聞いたことある？」

「はい、ありますけど、いまいちピンとこないんですよね」

「そう。文化命令ってね、神様の造られた世界をみこころにそって管理するようになっていうことなの。時々、社会で働くことは利益追求や不正があって悪いことだとかいう人がいるけど、それは誤解だと思うの。神様はクリスチャンに罪に墮落した社会でみこころをなしていくことを望んでおられるのよ。私たちが社会のあらゆる分野で、神様のみこころを求めて働くことはとっても大切なことなのよ。神学校に行つて、将来、牧師や伝道師になることも素晴らしいことだけど、それは決して社会で働く人よりも偉いとか、優れているということではないのよ。社会の中で、主のみこころを求めて、その場で献身するクリスチャンと牧師に優劣はないの」

「私、今まで何となく、社会で働くことに恐れをもっていたし、それに神学校に行く人たちに憧れのようなものをもっていたんだと思います」

「私も学生の頃、同じように思っていたわ」

「万里子と慰子は互いを見つめて笑った。」

「万里子さん、私のことではないんですけど、由香が今、内定二つももらっているんですけど、どっちにしようかって迷ってるんです。何かアドバイスしてあげてくれませんか」

「そっかあ。四月から教会に来たり来なかったりしてるから心配してたのよ」

「由香にとってはどうっちも行きたい会社らしいんです。そういうときって、どうやってみこころだってわかるんですか」

「みこころってなかなかわからないことが多いわよね。聖書を読んで、こっちの会社に行きなさいとか、この人と結婚しなさいって書いてあれば分かりやすいけど、聖書には書いてないからね。でもね、慰子ちゃん、そもそもなぜみこころを求めろの？」

「なぜって……」

「みこころだと失敗しないから？みこころなら絶対大丈夫だという保障があるから？」

「うーん、確かにみこころだったら、たぶん失敗せずにうまくいくだろうって思うのはどこかにあると思います」
「そうよね。でもね、みこころっていうのはね、AかBか、右か左か、どこに行くかっていうことではないと思うの。」

誰と一緒に行くかということが大切なのよ」

「誰と一緒に行くか？」

「そう、日々、主とともに歩み、主のみこころを求めて主が正しい、また主が良いと見られることを考えて行動することがみこころなのよ。日々、聖書も読まないで、祈りもしないで自分勝手に生きていて、いざという大きな決断の時だけ、みこころを教えてくださって祈ってもそれはちよつとね……」

「そうですよね……」

慰子は万里子と話して、胸の内が軽くなった。そして、もう一度就活をしようと思つた。神様が造られたこの世界をみこころにそつて管理していくこと、この日本というまるで神がいけないかのように見える社会の中で、主の主権を認め、主のみこころを求めて生きていくクリスチャンでありたいと思つた。地の塩、世の光として歩みたいと思つた。

「慰子ちゃん、一緒にお祈りしましょうか」

「はい」

いつの間にか、教会には慰子と万里子だけになっていた。教会の外灯が闇の中でくつきりと輝いていた。

17

相田愛作様

前略

図書館の洋書コーナーで、あたふたしている私に声をかけてくれたのが愛作君だったと知つた時の驚きを、何と言葉にしたらよいでしょう。春休みに東京から実家に帰ってきましたが、私は英文科の先生に出された課題に取り組んでいました。この先生は五十代半ばの女性で、自分はクリスチャンだと言っておられました。C・S・ルイスという作家が大好きで、先生は「ナルニア国物語という児童文学を読んだことがありますか」と私に尋ねました。名前は聞いたことはありません、と私が言うと先生は「それならこの春休みを



使つて英語で読みなさい」と言われました。そして先生は「きつとあなたもナルニアに夢中になるわよ」と笑つておられました。私は先生に勧められるままに、大学の図書館で「ライオンと魔女」「カスピアン王子のつづえ」を借りました。児童文学ということもあり、私の英語力でも辞書を片手に読むことができました。読むうちに私はすっかり「ナルニア」に夢中になってしまいました。そして魔法にかかったように、借りてきた二冊を一気に読み終えました。そして次の作品を読みたくなって近所の図書館に行ったというわけです。私の探していた「ナルニア国物語」は洋書コーナーでも一番高い所がありました。背の低い私でも台に乗って手を伸ばせば何とか届きそうでした。そして台に乗って、本を手にした時、急に携帯に着信がありました。マナーモードにしておらず、大きな音が静かな図書館に鳴り響いたのです。私は恥ずかしさと申し訳なさで床に落ちた本を拾いました。そしてそのとき、思わず床に落としてしまいました。私は最初、図書館の司書に声をかけられたと思いましたが、優しく声をかけられたとはいえ、次には電源を切るように、本は大切にするようにと厳しく注意されるのではないかという覚悟で後ろを振り向いたのです。しかし、そこには見覚えのある顔がありました。愛作君もずいぶん驚いた顔をしていましたね。私は司書ではなかった安堵から、つい「愛作君じゃない」と声が出てしまいました。本当に愛作君でよかったです。

缶コーヒーと一緒に飲みながら（おごつてくれてありがとう）、愛作君がクリスマスチャンだということを聞いてまたまたびっくりしました。ミッシェンスクールであるT女大に入學してからというもの、私の周りにはクリスマスチャンが数名います。お話したように私の好きだった祖母もクリスマスチャンでしたから、クリスマスチャンと聞いただけで、みんないい人と思えてしまうのだから不思議です。私のクリスマスチャンの先輩で愛香という人がいますが、名古屋にもKGGKがあるんですねと話したら、ちょっと驚いた様子で「東海地区KGGKには私の知っている子がいるのよ」と自慢げに言っていました。どういふつながりがあるのでしょうかね。

ところで、私の祖母はただ一人、親戚の中でクリスマスチャンでした。多くの反対があつたようです。母の話では祖父の葬儀の時が一番激しかったそうです。詳しくはよくわかりませんが、祖父の葬儀は仏式でしたから、おそらくクリスマスチャンであつた祖母にとつては都合の悪いことがたくさんあつたのでしょう。小さいながらも親戚中の人が祖母に対して冷たく接していたのはよく伝わってきました。そんなことがあつてからも祖母は毎週教会に

KGKの進路セミナーは三、四年生が対象だと思っていたが、卒業生会長の野村さんからの個人的な誘いを受けて愛作は参加をした。

18

美咲からの突然の手紙は半年程前の図書館での出来事を愛作に鮮明に思い出させた。

「愛作君は何でクリスマスチャンになったの?」

美咲がそう尋ねたときの真剣なまなざしを今でも愛作は忘れることができない。愛作はその問いに真剣に答えようとした。しかし、突然稲葉が現われて邪魔をされて答えられなかった。愛作はその口惜しい記憶も同時に思い出した。

愛作は美咲からの手紙に対して丁寧に返信をしようと思った。自分がいかにして主イエス・キリストを信じるようになったのか。そしてそのことが自分の人生にとっていかに大切なものであるか。そしてそれは自分だけでなく、美咲にとってもそうであることを自分の言葉で美咲に伝えたいと思った。

行っていました。祖母に「美咲ちゃんも一緒に教会にいこう」とよく誘われていましたが、父がひどく反対していたので行くことはできませんでした。祖母がどうしてそこまでして教会に行くかは理解できませんでしたが、私に対して誰よりも優しくしてくれた祖母だったので、何か特別な理由があるに違いないと思っていました。だから、愛作君がクリスマスチャンだと聞いたとき、祖母と同じように何か特別な理由があるのだろうと思いました。そしてその理由を聞きたいと思い、尋ねたのです。でも、そのような大切なお話をしようというときに、最後まで聞かずに帰ってしまったことは、どれほど愛作君にとって失礼なことだったろうかと反省しました。そして愛作君に謝ろうと思いましたが、でも、どうしても図書館に足を運ぶことができませんでした。直接会う機会もなかなかもてないと思い、このように手紙を書きました。私の無礼をどうぞお赦してください。

草々

九月七日 小坂美咲

「進路のことは一年生や二年生の頃から祈り始めるといいよ。それに進路セミナーといっても聖書の労働観に就いての学びだから、就活をしてる人だけじゃなくて、これから就活する人にも聞いてほしいんだよ。まさに愛作君のような二年生にね」

そのように言う野村さんは営業マンをしているせいかな、その誘い方は何とも魅力的で、説得力があり断りきれなかったと、愛作は同じく進路セミナーに参加した光子に言った。すると光子は目を丸くして共感した。

「そうそう、私も野村さんに誘われて参加したのよ。あの誘いを受けたら参加しないとねえ」

「野村さんの言うとおり、進路セミナーに参加してよかったよ。まだ二年だけど、一年後には就活することになるんだもんな。聖書の労働観を今日聞けて、なんだか世の中で働くことの見方が変わったよ」

「私は教員志望だけど、クリスチャン教員としてどのようにあるべきかって考えさせられたわ」

「二人ともよかったわね。私は来週、ある会社の最終面接なの。改めて聖書の労働観を学べて本当によかったわ。そこに決まるにしても決まらなくても今日学んだことを社会で実践していきたいわ」

二人の会話を嬉しそうに聞いていた慰子の顔は以前のような曇った様子はなく、晴れ晴れとしていた。

「来週の面接のためにお祈りしますね。ところで、光子ちゃん、この前の夏会議はどうだったの？」

今春の全協春会議は光子にとっては初めてのものであった。三泊四日会議尽くして光子がへとへとになって帰ってきたことを愛作はよく覚えていた。

「うん。お祈りありがとう。今回の夏会議は二回目だったから会議全体のこともだいたい予想できたから前回ほどはばてなかったの」

「そりゃあ、よかったね。前回はほんとときつそうだったもんね」

「うん。そうね。今回は会議でNCの準備のこととか話し合われたのよ。詳しくは祈禱会や十二月の総会で話すけどね。それよりね、今回嬉しかったのは、各地区の夏期学校報告をじっくり聞いたことなの。それぞれ地区の夏期学校には例年よりも多くの求道者が参加したの。信仰決心をした人もいたんだって。あとね、関東地区の全協で藤原愛香っていうT女大の子がいるんだけどね、その子との個人的な分かち合いがすごくよかったの。愛香と同じ学校の求道者の友人のことを詳しく聞かせてもらって一緒に祈ったの。その人ね、去年に続いて今年も参加してくれたんだって。それでね、今回の夏期学校が終わってから愛香と同じ教会に来てくれる

「なんだって。まだイエス様を信じる決心はできないけど、教会には行ってみたいって言ってくれたそうなの」
 愛作は「丁女大の愛香」と聞いて、その求道者は間違ひなく美咲であることを確信した。

「ひよっとしてその愛香さんの友人って小坂美咲っていう人なんじゃない？」

「え？愛作君、知ってるの？たしか、愛香はミサキって言ってたわ」

「やっぱりね。実はね、二日前にその人から手紙をもらったんだ」

「え？そうなの？私鳥肌が立っちゃった。何だかすごいね。愛作君の知り合いだったなんて。ぜったい神様の深いご計画があるわ。もしよかったら詳しく聞かせてくれない？」

慰子も光子と同様、興奮しながら愛作にお願いした。

愛作は美咲のこと、手紙のことを一部始終話をした。ただ、自分が美咲に特別な好意を抱いているということを除いては……。

19

後期の学内活動が始まり、前期に引き続きA大でのDPMは行われていた。五月の終わり頃からA大聖研に関わり始めていたクリスチャン新入生の羽貝建次が後期からはDPMに参加し始めた。羽貝は夏期学校の最後の夜の証し会で夏期学校中の集会で教えられたことを涙しながら分かち合った。彼はメッセージ箇所であったエゼキエル書十八章の最後の部分を読んだ時に悔い改めに導かれたのだと語った。

「神様が自分の目の前で『悔い改めよ。あなたのそむきの罪を振り捨てよ。すべての罪を放り出せ。そして、新しい心と新しい霊を得よ。なぜ、おまえは死のうとするのか。わたしはお前の死を望んでいない。だから、悔い改めて、生きよ！』そうやって自分に語っておられることが初めてわかったんです」

羽貝は夏期学校後、明らかに変わった。それまでは日曜日の礼拝に行かずにはバイトをしていることもあった。愛作たちはそのことを注意したが、羽貝は「バイトが忙しいからしょうがない」と言い訳をしていた。しかし、夏期学校後は日曜日にバイトをしなくなり教会に行くようになった。その上、教会の中高生たちの集会で奉仕をするようになった。自分と歳が近い高校生にイエス様のすばらしさを伝えたいからだと言ったと羽貝は愛作に分かち合ってくれた。

十一月に入ったある日のD.P.M. その日は珍しく愛作と羽貝の二人だけだった。お互いの祈祷課題をあげると、羽貝は以前お付き合いしていたクリスチャンではない女性と別れたと語り始めた。その理由を訊くと、羽貝はぼつりぼつりと語り始めた。

「夏期学校でメッセージを聞いて、自分は神様の前に大きな罪を犯していることが分かったんです。俺はその女性を肉体的にも精神的にもひどく傷つけました。取り返しのつかないことをしたんです。会う度に俺は彼女の身体を求めてたんです。最初は彼女もそれをゆるしてくれただけど、俺が身体ばかり求めてるくに彼女の話を聞かないから彼女は徐々に不信感を抱き始めたんです。俺も正直、彼女と肉体的な関係を持ってからは、彼女とゆっくり話すのが面倒くさくなつたんです。それからお互い気まづくなつてどうにもならなくなつたんです」

愛作は黙って羽貝を見つめた。羽貝は雑巾を絞るようにして再び重い口を開いた。

「夏期学校が終わってから、教会の牧師にすべて話したんです。先生は俺の話のすべて聞いてから、信仰義認について丁寧に話してくれました。

先生は『君はルターが言う「喜ばしい交換」ということを知ってますか?』と言いました。俺はルターは知っているがその意味はよくわからないと答えました。すると先生はこう言いました。

『イエス様が私たちの身代わりになられたというのは、片方向のみのことではありません。私たちの罪の身代わりとなってイエス様は十字架で死んでくださった。つまり、私たちの罪、ゴミはイエス様にすべて転嫁されました。でもね、それだけじゃないんですよ。それだけじゃない！羽貝君、私たちはイエス様に私たちの罪を全部転嫁しました。でもね、その代わりに、イエス様はご自分がもっておられた宝を私たちに与えられたんです。つまり、赦し、命、祝福、喜び、神の子という身分、天国、そして神の義そのものを私たちに与えられたんです。神の義、神の持っておられる正しさそのものを与えられたんです。だから神は私たちをばや裁くことをなさらないのです。ここでは、私たちとイエス様との間で一種の物々交換がされたんです。私の罪はイエス様へ、イエス様の義が私たちにという具合にね。これをルターは喜ばしい交換だと言いました。信仰によって義とされる、信仰義認とはこのことなんです。これは本来ありえないことです。こんな虫のいい話ないですよ。でもね、それこそが恵みなんです。一方的にいたたくしかない恵みなんです。羽貝君が犯した罪もすべてイエス様が負ってください。羽貝君、悔い改めて生きなさい。そしてその女性にも誠意を尽くして謝罪しなさい』

先生はその後、俺のために涙を流しながら祈ってくれました。俺も祈っている間ずっと涙が止まりませんでした。その後、俺は彼女に今までのことを謝りました。どれほど自分勝手であったかを彼女に詫言いました。結果的には彼女はもう違う男と付き合い始めていて、俺とはもう付き合い合えないということだったけど、彼女は別れ際にこう言ったんです。『建次、あなた変わったね』彼女はどこか疲れた感じで、とても寂しそうでした。」

20

アドベントに入った。A大聖研の活動はいつものように行われていたが、メンバーが休むことが多くなった。愛作は教会、KGGKで多くの奉仕を担い忙しくしていたが、A大聖研のDPMには毎日参加していた。

光子は十一月の中旬から突然活動に参加できなくなった。光子の母親が交通事故に遭い、両脚にひどい怪我を負ったためだった。

事故当時、光子の母親はスクーターに乗っており、交差点で前方の車が直進すると思っていたところが、急に左折されて車と接触したのだった。光子はその知らせを聖研の最中に知り、慌てて帰宅したのだった。検査の結果、少なくとも一ヶ月は入院をしなければならぬということ、光子は母親に代わって家事のいっさいをすることになった。

光子の父親は仕事を調整しながら助けたが、それにも限界があった。光子にとって特に大変だったのは、二人の弟の世話をする事だった。すぐ下の弟は中学二年、その下の弟は小学五年であった。思春期を迎えたすぐ下の弟は光子が作る食事に気に入らないと「まずくて食えない」と暴言を吐き、光子によく喧嘩を売った。光子はその弟の言動に悩まされていた。光子はバイトを休み、学校と家事の両立をするだけで精一杯という状態だった。光子が参加できなくなったことで、それまで月に二回は聖研に参加するようになっていた稲葉が来なくなった。愛作は稲葉に聖研に来るように誘ったが、「光子ちゃんのない聖研に参加しても楽しくない」と稲葉に断られ続けている。

慰子は九月に最終面接までいった会社が結局、不採用になった。一週間はショックで就活をすることができなかったが、その後、気持ち切り替えてまた最初から就活をやり直すことにした。DPMや聖研には以前ほど来

れなくなっていた。

由香は二つの会社から内定をもらっていたが、結局実家から近い会計事務所に決めた。その後は、授業とバイトで忙しい日々を送っていた。聖研には月に一回くる程度で、DPMには来ていなかった。

羽貝は教会の中高生クリスマス会でバンド演奏をすることになり、十二月に入ってから、練習の回数が増え、練習日が聖研と同じ木曜日に重なり、参加できなくなってしまった。

羽貝とほぼ同じ頃に聖研にかかり始めた新入生で松田恵という学生がいた。入学式のとときに、光子から聖研のちらしを受け取ったというクリスチャンの学生だった。恵は月に一回は聖研に参加してくれていたが、前期試験が始まる頃から聖研には参加しなくなり、メールをしても「参加できなくてすみません」と返信が来るだけだった。その後、数回光子と恵子は電話をし、メールをしたが、夏休みが終わる頃には携帯番号が変わっており、まったく連絡が取れなくなった。

四月から聖研に関わっていた求道者の悟は、夏期学校に参加してくれて、その後は中山献と同じ教会に集っていた。夏期学校で悟が献と同じ小・中学校へ行っていたことがわかった。献の家（そこは教会なのだが）から悟の家は徒歩十分のところにあった。悟は毎回聖研に参加してくれていた。

メンバーにそれぞれの事情があることがわかっていただけに愛作は辛かった。アドベントに入ってからDPMは愛作一人だけだった。聖研は悟と二人だけですることが多くなった。

愛作は今年度KGGKで運営委員をしており、教会ではCSの教師もしている。愛作自身、決して余裕があるわけではない。運営委員として東海地区のクリスマス会の準備や毎週月曜日の鶴舞祈禱会出席もある。平日は夜の九時から深夜一時まで焼肉店でバイトをしている。KGGKの委員会ミーティングや行事がない土曜日は朝から深夜までバイトをした。そんな目まぐるしい日々を送っている愛作にとってDPMに出席することが次第に苦痛になってきた。愛作のDPMに参加する動機はいつのまにか、リーダーとしての責任感からプライドを守るためになっていった。愛作はそのことを認めたくはなかった。そのため、余計に意固地になってDPMに参加することを自分に強いた。またそうしている自分が正しいと思った。そして、DPMに参加しない由香、光子、恵子、羽貝、さらには活動にまったく参加しなくなった恵を裁き始めた。なぜ彼らは活動に参加しないのか、結局はこの活動への優先順位が低いのだ。神様よりも自分を優先しているのだ。でも俺は正しい。間違っていない。俺はこんなに

頑張っているんだから：神様もきつと喜んでるだろう。

21

十二月第三週の聖研は愛作とその日、学校訪問をした浜根主事の二人だけだった。浜根主事がA大を訪問するのは、十月以来だった。その時は、光子、慰子、羽貝、悟も参加しており、活気のある聖研だった。

「A大聖研で愛作と二人だけの聖研なんてめずらしいな。こんなこともあるんだな」

「浜根さん、すみません、せっかく来てもらったのに、俺だけで……」

「謝ることないよ。それより、みんな元気にしてる？最近、鶴舞祈禱会にもみんな来ないから気になってるんだ。メールをしても、なかなか返信なくて、大丈夫かなあって心配してるんだ」

「俺もわかりません。最近はDPMは俺だけだし。みんなそれぞれ事情があるのは分かるけど、ちょっと自己中だと思っんですよ。俺は毎朝、DPMに出たことをA大聖研のメーリスで報告してるんですよ。報告っていつも、『DPMに参加しました、明日はみんな来てください』っていう程度のメールですけどね。でも、誰からも返信ないんですよ、まったくふざけてますよね。みんな聖研を何だと思ってるんだか……。結局、優先順位がみんな違うんですよ。俺は神様を第一に考えてますけどね。でも、DPMに毎回俺一人だけだったりすると、DPMをする意味があるのかなあって思うときもあるんですよ。ただの自己満のためにやってるだけなんじゃないかって。それに聖研だって、今日は浜根さんが来てくださったから俺一人にはなりませんでしたが、もしも俺一人だけだったら、聖研やる意味なんてあるのかなあって正直思いますよ。俺は聖研のリーダーとしてみんなに聖研の意義を何度も何度も分かち合ってきたんですけど、結局、ぜんぜん浸透してないみたいですよ」

「なあ、愛作。お前は自分が聖研やDPMに忠実に参加してきてさ、『俺は正しい』って思ってる？」

「え？まあ、そりゃあ、俺だって忙しいけど、みんなよりかは頑張ってるし、正しいって思いますよ。リーダーとしては客観的に見てもよくやっていると評価していいと思いますよ」

「そっかあ。確かにそうかもね」

浜根主事はそう言って、愛作をじっと見た。愛作はとっさに視線をそらした。

「僕がね、主事になって二年くらい経った時にさ、あることで同僚の主事と激しい言い合いになったことがあっ

てね」

「え？ 浜根さんが？」

「ああ。あの時はけっこう、僕もこだわりがあつてね、自分の考えを批判されて強く言い返したんだ。そうしたらね、その一部始終を見ていた総主事がね、別室に僕を案内して『正しいことと、ふさわしいことは違う』って僕にそつと忠告してくれたんだ。いくら正論であつても、それが相手にとってふさわしい言葉ではないことがあるんだって。正論だけでは人には届かない時があるし、正論だけではなかなか人はついてこないんだよ」

愛作は何も言えなかつた。しかし、浜根主事が言われたという『正しいことと、ふさわしいことは違う』という言葉を心の中で何度も繰り返した。その言葉を繰り返す度に愛作の心の中の手の届かない部分にその言葉がこたまして、その度に自分の心を深くえぐられていようような妙な気持ちになつた。

「愛作、何もしてなくても神様に愛されることわかつていいね」

「何もしてなくても？」

「ああ。神様は僕たちが何か素晴らしいことをしたから愛してくださっているわけじゃないんだ。勿論、主のために奉仕をしたり、こうやって学内活動をするということを主は喜んでくださるよ。でもね、もともと僕らが救われたことを考えてみても、僕たちが愛されるような立派な人間だから神様は僕らを愛したわけじゃない。むしろ神に逆らうような僕たちを神様は愛してくださったんだ。愛作は、もしも明日から今している教会や GKでの奉仕、学内活動がすべてできなくなつても、神様に愛されていることを確信できる？」

「今日、浜根さんと話せてよかつたです」

「おいおい、聖研はこれからだろ？」

「あ、そうでしたね」

愛作の顔にようやく笑顔が生まれた。

愛作からの手紙を読み終わった美咲はすっかり冷めたミルクティを飲んだ。時計を見ると、T女大聖研が始まる時間を十分ほど過ぎていた。(あ、いけない。遅刻だわ) 美咲は愛作からの分厚い手紙の束を封筒に入れると大学の食堂を急いで出た。

T女大はキリスト教主義の女子大で、学内の聖研は学校公認のサークルであると同時に、関東地区K G Kの正式団体加盟校でもあった。聖研メンバーは十五人で美咲の他にクリスチャンではない求道者の学生が三名定期的に集っていた。

聖研リーダーの愛香とは美咲が学生寮に入った時に同室となった。愛香は美咲の二つ上の学年で学生寮の中でも人気のある学生だった。

美咲が一年の時、新入生歓迎会が寮で行われた。多くの一年生がビールやチュウハイを飲む中、美咲はその雰囲気についていけず、一人でスナック菓子を片手にウーロン茶ばかり飲んでいて。そのとき、愛香が美咲の隣に座った。

「美咲ちゃん、どう、楽しんでる？」

「え、ええ。私こういう飲み会の雰囲気はどうも馴染めなくて。こういう場に来て、いっしょにはしゃげなくて、いつもノリが悪い、しらけるって言われるんです。それにみんなお酒飲んでますけど、私未成年だし、お酒を飲む人を見るとそれだけでひいちゃうんですよ」

「そっかあ。私もお酒飲まないよ。でも、みんなといっしょに時間を過ごしているんな話をするのは好きなの。だから、お酒は飲まないけど、学校の友達との飲み会にはついてくよ。私はしらふでもお酒飲んでる人より元気で、いつも『あんた、ほんとに飲んでないの』って言われるくらいなの」

「愛香さんはどうしてお酒飲まないんですか？」

「お酒って、それ自体は決して悪いものじゃないとは思いますが、飲み方によっては人を駄目にするし、誘惑にもなると思うの。それに、私ね、クリスチャンで、お酒を飲まないことを神様と約束してるのよ」

「愛香さん、クリスチャンなんですか？私の祖母もクリスチャンでしたよ」

「へえ、そうなの。美咲ちゃんは？」

「私は違います。でも、祖母はクリスチャンでしたけどお酒飲んでましたよ」

「クリスチャンみんながお酒を飲まないっていうわけじゃないの。クリスチャンでも飲む人もいるよ。教会によっても考え方が違うの」
 「へえ。そうなんですか」

この新入生歓迎会以来、美咲は愛香に好感を抱いた。そして、愛香に誘われて一緒に聖研にも顔を出すようになった。そして、一年の時には夏期学校に参加した。夏期学校は美咲にとって聖書をより深く知る良い機会となった。しかし、夏期学校で同じグループだったG院大学の黒田というクリスチャンの男子学生から夏期学校後に執拗なメールを送られ、美咲はうんざりした。クリスチャンの男性は少なくとももう少し良識のあるメールを送るはずだと思っていた。しかし、黒田のメールは美咲を個人的にデートに誘うような内容ばかりだった。幸い、黒田は翌年卒業し、美咲が二年になってからメールは来なくなった。

愛香と寮で同室であることは美咲に大きな驚きと尊敬を与えた。愛香は毎朝、食事の前に一人で聖書を読み祈っていた。美咲にとって身近なクリスチャンであった祖母も毎日こんなことをしていたのだからとふと思ったりもした。

美咲が二年になってからは愛香とは別室になったが、美咲はよく愛香の部屋に遊びにいった。愛香の言うことは学友や他の寮の学生の言うことと何かが違っていった。最初はその違いがよくわからなかった。しかし、次第に愛香の恋愛観、結婚観というものが他の学生のそれとは決定的に違うということが判ってきた。愛香は「結婚まで処女を守る」と恥らいなく言う。他の寮生たちは愛香を馬鹿にして「いつの時代の人よ。化石になっちゃうわよ」「結婚して相性が合わなかったらどうすんのよ」とよく言った。しかし、愛香は臆することなく、いつも「神様はすばらしい結婚を私に用意されているから、私は祈って待ってるの」と笑顔で言うのだった。美咲はそんな愛香が羨ましかった。自分にもそんなすばらしい結婚ができるならしたいと思った。

聖研の部屋まで走りながら、そんな過去のことを思い出したのは、今読み終わったばかりの愛作からの誠実な手紙を読んだからかもしれない。

走る美咲の鼓動がより早くなった。

地下鉄東山線の伏見駅で乗換え客の雑踏にまみれながら愛作は目をつむった。

——自分は今から教会に行く。しかし、目の前の大勢の人はどこに行くのだろうか——
 ——自分も永遠の命をいただきたい。しかし、目の前の人々はイエス様を知らずに滅びへと向かっているのではないか。皆さんはそのような滅び行く魂への憂いを感じていますか——

今から十年前の春期学校で宮本隆が語った言葉だ。その宮本が今日、結婚する。

愛作は伏見駅で鶴舞線に乗り換えた。

「愛作君、久しぶり」

振り向くとそこには詩織が立っていた。詩織と会うのは三年振りだった。

「詩織さん、久しぶりですね。今日はお一人ですか」

「ええ。そうなの。今日は主人に子どもを見てもらってるの」

「そういえば、お子さん、もう一歳になりましたか」

「来月でちょうど一歳よ。早いものね。愛作君と会うのは私の結婚式以来よね」

「そうです。時が経つのは早いもんです」

「今日はA大聖研メンバーはみんな来るのかな」

「ええ。そのはずですよ。卒業してからみんな仕事で忙しくてなかなかK G Kの卒業生会でも会えないけど、結婚式の度に全員集合って感じですよ」

愛作が大学を卒業して六年が経った。愛作は三年前にK G Kの主事となり、今は東京での一人暮らしをしてい

る。

大学卒業後、愛作は事務用品を扱う会社に就職し、営業をした。しかし、三年目の春に突然、浜根主事に呼び出された。そして主事になることを考えてみないかと言われた。愛作は当時、仕事で忙殺されていた。教会には毎週行っているのだが、信仰生活は落ち込んでいた。学生の頃は教会に集う壮年の男性たちを見て、何と疲れきった顔をしているのだから、クリスチャンだったらもつと喜びをもって教会に来るべきだろう、それにあんなんじゃないこの社会の中で証にならんだろう……そのように心の中で非難し、だから教会が成長しないんだと呟いていた。しかし、愛作は浜根主事と話しながら、自分は駄目な奴だ、しよせん自分もかつて非難していた疲れきった名ばかり

りのクリスチャンに成り下がってしまった、こんな者が主事になれるわけがない。いや、なるべきじゃない。愛作はそのような心の内を正直に浜根主事に語った。

すべてを語った後に浜根主事は愛作の顔をじっと見て言った。その時愛作はかつて浜根主事と二人だけの聖研をした時のことを思い出した。自分こそ正しいと聖研メンバーを裁いていた頃の自分。あの時と同じ浜根主事のまなざしだった。

「神様の召しよってさ、感情が高ぶってる時も、そうでない時もいつも変わらさず心の内にあるものさ」

浜根主事と別れた後、愛作は歩きながら浜根主事の言葉を反芻した。そして、かつてのA大聖研での活動、KGKの夏期学校、春期学校、聖書合宿、NCで出会った信仰の同業者たちのことを思い返した。あの時はよかつたなあ、まさに靈的温室状態だったなあ……。そう思った瞬間、愛作の泥沼のような心の奥底から閃光のごとく御言葉が噴き出した。

カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい——
 大学三年の春期学校の早朝、一人で静思の時を持っていた時と同じ閃光を見た。自分は向き合いたくなかったのだ。逃げていたんだ……。愛作は月光に目を細めた。そうだ。神様はずっとあの時から呼んでおられたんだ。愛作は立ち止まり、祈った。心の中を舐め回すように充滿していた迷いが晴れた。

結婚式の会場である教会には光子、由香、稲葉がすでに待っていた。彼らと会うのも三年振りだった。稲葉は愛作が主事になった翌年に洗礼を受けた。「ようやく降参したよ」そう言って苦笑しつつも以前とはまるで別人のようになった稲葉のことをつい昨日のこのように愛作は思い出していた。

「あれ、今日はフィアンセは一緒にじゃないのか」

稲葉は愛作の横腹を右肘で突付きながら言った。

「ええ。今日美咲さんに会えると思ってたのに」光子がいかにも残念そうに言った。

「今日は愛香さんの結婚式に出てるんだ」

「そっかあ。私は迷った末、こっちに来たんだわ」

愛作は半年後の来年の四月に美咲と結婚をする。

「あ、見て！慰子よ。わあ、すっごい綺麗！」

由香の言葉で皆が一斉に振り向いた。パージンロードのすぐ前で父親と並ぶ慰子が眩しかった。(了)

小説 学生の伝道

初版 2010年2月20日

著者 浜田 進

イラスト 山口 新

発行者 キリスト者学生会主事会

発行所 キリスト者学生会

〒101-0062

東京都千代田区神田駿河台2-1 OCCビル3F

TEL. 03-3294-6916

FAX 03-3294-6050

e-mail office@kgkjapan.net

